

松風館十勝碑林建立十五周年記念事業

河相君推と松風館十勝

菅茶山と中條村の文人たち

菅茶山顕彰会

発刊にあたって

菅茶山顕彰会 会長 藤田卓三

福山市神辺町西中条山田谷に「松風館十勝碑林」を建立して十五年余が経過した。碑林のルーツ「松風館十勝」は「西中條村史」(金尾直樹 明治十五年)に銘記されながら、史跡が消滅している故か、地元で普遍化されていなかった。そこで、河相君推の業績顕彰と菅茶山の足跡を印すために本会が主導して事業を起こしたものである。この度、十五周年記念事業として、「十勝碑林」に説明板設置と駐車場新設並びに記念誌「河相君推と松風館十勝」や「栞」の発行等を二年計画で進めていた。

江戸時代後期に「菅君、詩を以て世に鳴る」と評された菅茶山が足繁く通った天領中條はこの時期はまさしく「大輪の文化の華」が開いたようであっただろう。

河相君推は豪農で酒造業を営み、書画骨董の類の蒐集家、和歌を嗜む風流人でもあった。屋敷内に客殿「松風館」を建て、その傍らに池亭を配するとともに山田谷全体を巡る「松風館十勝」を設けた。

茶山は君推と遠縁にあたる気安さもあって、廉塾を訪れる多くの文人たち(頼兄弟・西山拙斎など)を頻繁にこの松風館や近くの古刹遍照寺の詩会、月見の宴などに案内している。一時期廉塾都講として滞在した頼山陽も招かれ詩を詠んでいる。

さらには、中條村の文人たち、河相子蘭・松井子瑠・篁大道や大空上人・乗如上人なども折に触れての詩会・書画会などに招待され、多くの詩を残している。

菅茶山顕彰会が、再度「河相君推と松風館」についての史実を検証すると共に、菅茶山の中條村への足跡を明らかにして、小冊子を作成する意義は、後世に伝える温故知新の心であり、「十勝碑林」を建てた先輩たちへの謝恩でもある。さらには、中条地区の「地域おこし」の一助になることを希望してやまない。

結びに、今回の特別プロジェクト事業等に過分の助成を賜った一般財団法人義倉並びに高橋孝一様ご遺族に対し、衷心よりお礼申し上げます。

令和四年一月吉日



菅茶山ゆかりの中条の寺院と史跡



遍照寺山門鐘楼



寒水寺本堂



廣山寺本堂



圓通寺全景



象山献燈と地神様



中条高居に建つ茶山詩碑



河相君推の墓



唯一現存する迎碧墩碑



大空上人招魂碑

目次

発刊にあたって

菅茶山ゆかりの中条の寺院と史跡

松風館十勝碑林と十勝碑

一 松風館十勝碑林について

(一) 除幕の式典

(二) 建立された石碑

(三) 謎であった松風館十勝名が明らかになった経緯

(四) 「衝立」から判ったこと

(五) 十勝名を墨書した人物と菅茶山の関係

(六) 十勝碑完成までに約十六年の歳月

(七) 松風館と十勝はどのように配置されたのか

二 河相君推と河相家について

(一) 河相君推

(二) 象山献燈の建立

(三) 河相家と本荘屋菅波家・菅茶山の関係

(四) 君推の子どもと絶家

(五) 土居河相家墓域と河相君推の墓

三 松風館（河相君推宅）で詠まれた詩

(一) 天明五年の作 (二) 天明八年の作 (三) 寛政二年の作

(四) 寛政四年の作 (五) 寛政五年の作 (六) 寛政七年の作 (七) 寛政九年の作

(八) 文化六年の作 (九) 文化八年頼山陽作 (十) 菅茶山ゆかりの中条地図

菅茶山と中條村

一 菅茶山と文人サロン「中條」

(一) 遍照寺と大空上人

(二) 河相子蘭

(三) 松井子璐

ページ

5

14

17

23

(四) 篁大道

二 遍照寺を訪ねたり、中條の詩友と詠んだ詩

(一) 安永二年～三年の作 (二) 安永七年の作 (三) 天明二年の作

(四) 天明三年の作 (五) 天明四年の作 (六) 天明五年の作 (七) 天明六年の作

(八) 天明七年の作 (九) 寛政十年の作 (十) 文化七年以前の作

菅茶山が往来した中條路

一 中條往還

二 往来路上で詠んだ詩

(一) 天明二年以前の作 (二) 天明四年の作 (三) 天明六年の作

(四) 寛政五年の作 (五) 寛政十一年の作 (六) 文化七年の作

(七) 文化九年から十年の作 (八) 文政六年頃の作

仮説「松風館十勝は邸内及び山田谷一帯に設置された」

(一) 詩や文献より推察する (二) 地籍図と現地調査、古老からの聞き取り

で推察する (三) 十勝の位置を推定する (四) 松風館十勝推定地図

記録「松風館十勝碑林建立」

一 松風館十勝碑林除幕式典

二 松風館十勝碑林祝賀会

三 松風館十勝碑林建立の経緯

四 松風館十勝碑林建立十五周年記念事業

付表 漢詩索引「茶山・君推年表」

参考文献

終りに

編集・発行

中条村の表記について

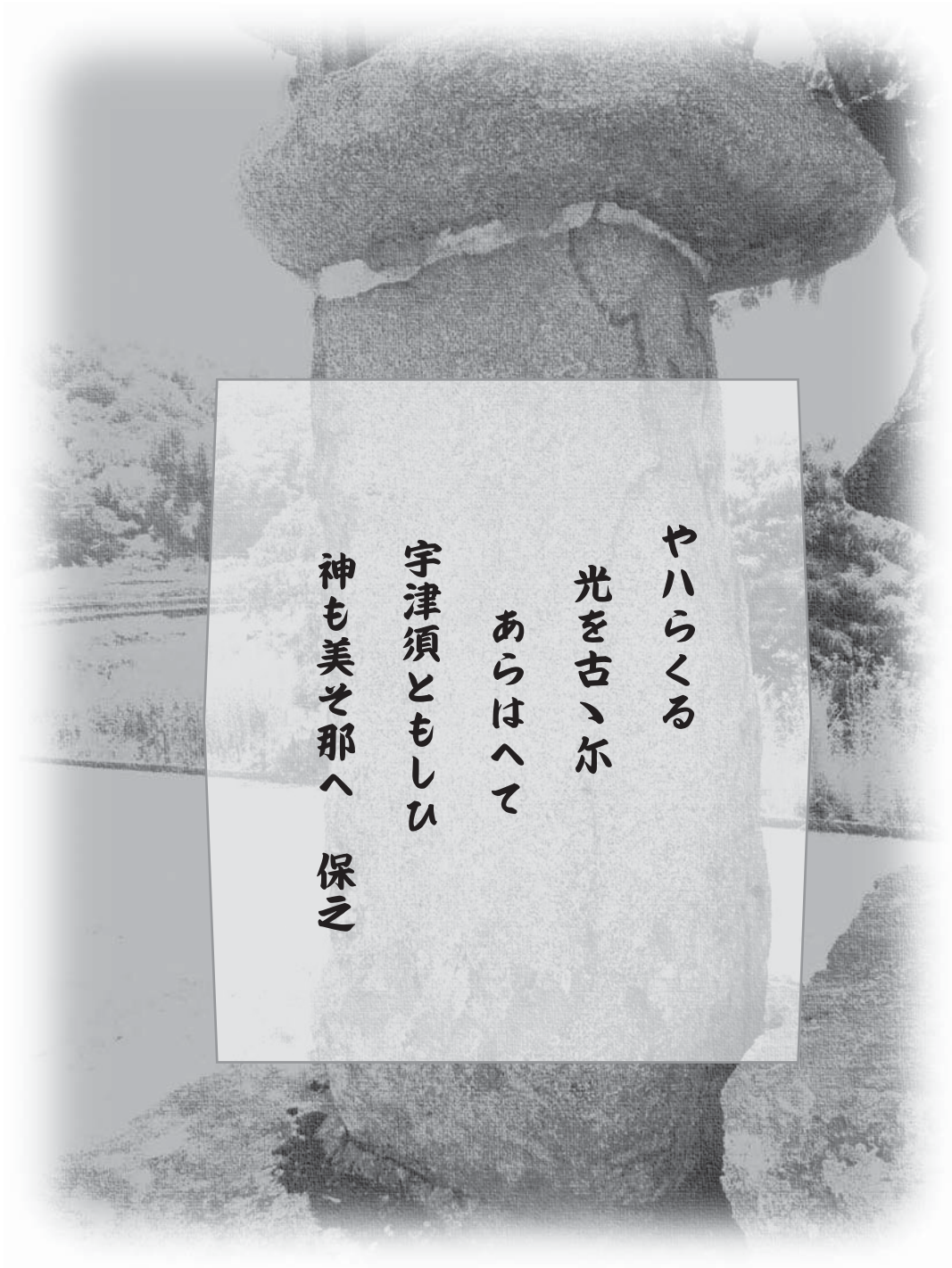
菅茶山の時代については「中條」、
現在での表記は「中条」とした。

25

38

48

52



やハらくる

光を古ゝ尔

あらはへて

宇津須ともしひ

神も美そ那へ 保之

象山献燈の裏面に刻された
河相君推の和歌

松風館十勝碑林建立と十勝碑

一 松風館十勝碑林について

(一) 除幕の式典

平成十八年(二〇〇六)二月二日 福山市神辺町西中条山田谷内の「象山 松風館跡」西の一角に建設が進められていた「松風館十勝碑林」の除幕式が盛大に執り行われた。式典には松岡宏道広島県議会議員様、佐藤秀毅神辺町長様(代理)、藤原平一般財団法人義倉理事長様をはじめ地域の町内会長様や菅茶山顕彰会の役員など多くの参加のもと完成を祝った。その様子は『菅茶山顕彰会会報第十六号』で報じられた。(写真は会報から転載)



開会式の様子



各碑の除幕

菅茶山顕彰会会長高橋孝一氏はその中で次のように述べている。

漢詩人茶山について、儒者亀田鵬斎をして「菅君、詩を以て世に鳴る」と言わしめたように、当時の著名な儒者たちの金石文が、このように神辺の地にもたらされた意義は大きい。

昨年、この史跡を顕彰するため、松風館記念碑建立を発起したところ

(二)

① 建立された石碑

顕彰会役員ならびに有志の方の格別のご理解とご協賛をいただき、今回ゆかりの地に、三基の松風館関係碑と十基の十勝碑、三基の詩碑が建立されました。そして、この庭園を中国の「西安碑林」に倣って、「松風館十勝碑林」と命名しました。

ご協力、ご尽力をいただいた関係各位に、深く敬意と感謝の意を表するとともに、この「碑林」が茶山文化を偲ぶよすがとなり、福山市との合併記念として、神辺の新たな史跡名所となることを願うものである。

注 除幕式の詳細は後述の「記録 松風館十勝碑林建立」参照

石碑「松風館十勝」建立菅茶山顕彰会



石碑「松風館跡」建立神辺町長 佐藤秀毅



石碑裏面 「河相君推と松風館」

㊦ 十勝碑と刻された人物



娛論亭
菅茶山



鳥語洞
赤崎彦禮



鳴玉橋
菅 恥庵



棟棠橋
倉成龍渚



松風館
頼 杏坪



迎碧墩
柴野栗山



垂白棚
紫 源



魚樂梁
龜田鵬齋



紅於徑
岩瀬華沼



浸翠池
山本北山

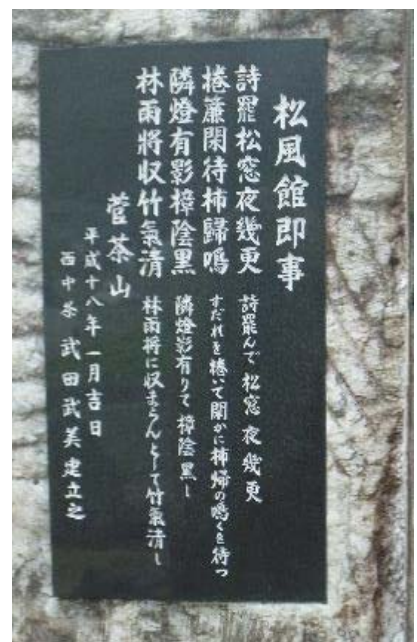
㊦ 松風館を詠んだ詩碑



詩碑「河相保之松風館同菅禮卿賦」
建立 神辺町教育長 重政義宣



詩碑「所見」 建立 松井義典



詩碑「松風館即事」
建立 武田武美

(三) 謎であった松風館十勝名が明らかになった経緯

松風館十勝とはどのようなものであったか長年不明であった。

①「西中條村史」(金尾直樹著、明治十五年出版)に次のようにある。

河相周次郎ハ山田谷ニテ當時村中有名ノ富家也 同人實名保之ト云。備中後月郡井原村ノ産、嘗テ和歌ヲ嗜ム、讀ム歌ノ中ニ「香ひくる風を枝折にわけ入りて問はや梅の花の山里」ト云エルハ墓碑ニ刻セリ。菅晋帥ト金蘭ノ交アリ。同人庭前ニ茶翁ノ直筆ニテ常夜灯ノ銘アリ、又邸内假山ノ内十勝石標アリシ、一ハ柴栗山先生ノ銘也、曰「迎碧墩」該石ニ茶山先生ノ記アリ、「迎碧墩、右柴博士栗山之書、松風館十勝石標之一也、文化甲子余在江戸、爲主人請之、原本有二印、日柴邦彦、日柴彦輔、以字細不刊、乙丑正月、晋帥」ト。今猶存ス。又頼翁潤筆ノ額アリ、松風館ト云フ。松風館十勝中、鳴玉橋ヲ咏スル西山拙齋ノ歌アリ「柴橋を掛て幾世も住ぬべし玉を鳴せる松の下水」。(下略)

『備後史談十六卷十号』より引用

「中條村史」から次のことがわかる

○十勝は邸内及び假山に設置されていたこと。

○石標の一つは柴野栗山の銘であること。

石碑には、茶山が文化元年(一八〇四)江戸滞在時に、主人の為に書いてもらったこと。原本には柴邦彦と柴彦輔の二つの印が押してある。

○頼翁潤筆の額があり「松風館」と記してあること。

○松風館十勝中の「鳴玉橋」を西山拙齋が和歌を詠んでいること。

②「松風館十勝」の原本が見つかる

それまで十勝の内「松風館」「迎碧墩」「鳴玉橋」しか明らかにならなかった「十勝名」の全てが、猪原薫一、濱本鶴賓両氏の調査で明らかにされ、昭和十五年(一九四〇)『備後史談十六卷第十号』で発表された。

それによれば、「紙本墨書衝立」に菅茶山書ほか九勝の名称と墨書名がある原本であった。この衝立は府中市木村家所蔵で大幅に表装されたものであった。この木村家は、菅茶山の弟子木村雅寿の縁戚阿賀谷木村家である。

平成二十二年(二〇一〇)「菅茶山ゆかりの拓本展」(菅茶山記念館)が開催され、その中で「紙本墨書衝立」が紹介された。この衝立は旧千葉家所蔵(現在安芸郡海田町織田スクエア所有)のものであるが、『備後史談十六卷第十号』で発表された仕立(衝立)の記述と同じである。所在変更の時期等は不明とのことである。衝立の書は次頁のとおりである(原文は漢文)

(四) 「衝立」からわかったこと

① 四勝は四角形木柱に刻まれ、各勝を案内するものである。

「松風館」	頼杏坪(広島藩儒、頼山陽の叔父)
「棧棠橋」 <small>ていとうきょう</small>	倉成龍渚(豊前中津藩儒、能書家)
「鳥語澗」 <small>ちようごかん</small>	赤崎彦禮(薩摩藩儒者)
「鳴玉橋」 <small>めいぎょくきょう</small>	菅恥庵(茶山末弟)
四勝名の下に記文	永富充國(肥前国五島藩儒)

記文に「池亭四勝標柱と為す 蓋し以て其方なるを知る也」とあり、四勝は一本の木柱に記された四角柱で、四勝の方向を示していた。「寛政戊午竹酔日」とあり、寛政十年（一七九八）五月十三日に記される。



<p>松風館</p>	<p>棟棠橋</p>	<p>鳥語澗</p>	<p>鳴玉橋</p>	<p>迎碧墩</p> <p>右柴博士の書、園中十勝石標の一つなり。 文化甲子余江戸に在り、主人の爲に之を請う。 乙丑鳥語澗の北岸に刻立す、此れ其の原本と云う。 菅帥識す</p>	<p>浸翠池</p> <p>魚樂梁</p> <p>鵬齋興書</p>	<p>紅於徑</p> <p>垂白棚</p> <p>紫源</p>
<p>此れ河相君推の池亭四勝標柱と為す 蓋し以て其方なるを知る也。以て菅処士 茶山、客を愛し四方より來問の者多き也。 因て有名なる士をして各題を請う。 其の一つ 棟棠橋 は中津倉成善司、 鳥語澗 薩摩赤崎彦禮、 松風館 安藝頼千禰 鳴玉橋 則ち処士弟菅信卿也。 余後に命至りて其の事を記す、 余は長門永充國なり、 時に寛政戊午竹酔日</p>				<p>是れ松風館諸勝標 以て諸老宿書袿装す 以て弃て別つ娯論亭有り 其扁則ち余書する所 併せて十勝と為す。 原字若しくは摹搨を此に 副うと云う 搨無し</p>	<p>菅帥識す 文化己巳 嘉平月十日</p>	

② 「迎碧墩」 柴野栗山（讃岐の人、昌平塾教授）

衝立の記文から文化甲子（文化元年一八〇四）、江戸で茶山が主人（河相君推）のために柴野栗山に依頼して書かれたことがわかる。さらに、乙丑（文化二年）鳥語濶の北岸に建立したと記している。現存する石碑「迎碧墩」には次のように刻してある。

迎碧墩 柴栗山書・菅茶山書
右柴博士栗山之書松風館十勝
石標之一也文化甲子余在江戸
為主人請之原本在二印曰柴邦
彦曰柴彦輔以字細不刊
乙丑正月 晋帥



現存する迎碧墩碑

この「迎碧墩」の石標は現存する唯一のもので、松風館跡から場所を東に変えた中条山田地区の親戚筋の庭に建っている。

石碑は、「文化二年（一八〇五）一月に刻まれた」とあり、池亭四勝の木標より七年後に刻まれたとわかる。

③ 「浸翠池」 山本北山（江戸の儒者）

印中に「信有」とあり、名を信有といい山本北山とわかる。

④ 「紅於徑」 岩瀬華沼（肥前島原藩儒）

印中に「行言」とあり、名を行言といい岩瀬華沼とわかる。

⑤ 「魚樂梁」 亀田鵬斎（江戸の儒者）

「鵬斎興書」とあり、亀田鵬斎の書であることがわかる。衝立の写真

ではよくわからないが、双釣（注）で書かれている。鵬斎は彫刻することがわかっていたので、別に「魚樂梁」の文字を書き、所定の紙に双釣で書き写して自署したものと考えられる。

注 筆跡などを写し取る時、中を白のままにしてへりだけを二重文字にして写し取ること。

⑥ 「垂白棚」 紫源（不明）

墨書に「紫源」と署名しているが、人物像は不明である。

⑦ 「娛論亭」 菅茶山

これは原本も拓本もない。その理由が「衝立」の余白（左下）に直接書かれている。これによれば、「娛論亭」には茶山の書による木製扁額が掲げてあったらしい。茶山はその扁額に直接書いたので、原本はなく、またその扁額も未だ彫刻されていないので拓本もない」と文化己巳六年（一八〇九）十二月十日に書いていることがわかる。

⑤ 十勝名を墨書した人物と菅茶山との関係

① 倉成龍渚（一七四八～一八一三） 名 至、通称 善司

豊前中津藩儒で藩校進脩館の教授となり、江戸詰となる。『藤井暮庵先生行状略記』に「寛政八年（一七九六）九月十三日 豊前中津藩儒倉成先生に拝謁、詩を呈す」とあり、茶山を訪ねている。この訪問の時、請われて墨書したと思われる。

② 赤崎彦禮（一七三九～一八〇二） 通称 源助、字 彦禮、号 海門

薩摩藩儒で藩主に重用される。頼春水と親交があり、その縁で藩主の

参勤交代に扈從した際、茶山を再三訪ねている。寛政九年、十年に立ち寄ったことが『藤井暮庵先生行状略記』に残っている。この訪問時に墨書してもらったと思われる。

③ 頼杏坪(一七五六～一八三四) 通称 万四郎、字 千祺

頼兄弟(春水・春風)の末弟で頼山陽の叔父にあたる。広島藩儒となり三次・恵蘇郡代官を務める。茶山宅を再三訪ねており、書の交換もするなど親しく交流している。茶山から墓碑銘撰書を依頼されている。

寛政九年(一七九七)、藩主の世子の侍読となり、頼山陽の江戸留学に付き添う形で茶山を訪問している。また寛政十年、頼山陽が帰郷する際にも同行し茶山を訪ねている。墨書はこの時期になされたものと思われる。

④ 菅恥庵(一七六八～一八〇〇) 通称 圭二、字 信卿

茶山の末弟。家業を茶山から受け継ぐ。寛政十二年(一八〇〇)京都で客死する。寛政九年(一七九七)八月に長崎へ向かうので、それまでに墨書したと思われる。

⑤ 永富充国(一八〇一) 通称 数馬、名 亀山

寛政十年(一七九八)四月に茶山を訪ねる。『暮庵先生行状略記』に「先生(充国)ハ長門ノ人、肥前五島藩儒トナル。今致仕シテ上國ニ遊ブト云」とある。充国は約一年間滞在し、講義もしている。

松風館の標柱に四人の墨書者名を記したのはこの頃であると推察される。

⑥ 柴野栗山(一七三六～一八〇七) 名 邦彦、字 彦輔

西山拙斎や頼春水と親交があり、茶山とも早い時期から交流がある。茶山は文化元年(一八〇四)藩主の命により江戸出府し六月末に駿河

台の私邸を訪ねている。また、帰国の迫った七月、栗山の屋敷を借りて「饞筵の会」を開いている。この江戸出府の際、墨書してもらったのである。

* 江戸に向かったのは、文化元年一月二十一日であった。だが、茶山日記には「二十一日発程、別に日記有り」と書かれているだけで、その「日記」は今日失われており詳細は不明である。

⑦ 山本北山(一七五二～一八一二) 名 信有、通称 喜六

江戸の御家人の子で、塾「奚疑館」を創る。「寛政異学の禁」には亀田鵬齋らと強く反対した。

文化元年(一八〇四)茶山の江戸出府の時、会ったという記録を見つけることはできなかったが、北山は「叙情的な宋詩こそ詩人自らの個性を表現しえる最適な漢詩スタイルであると主張した」ことから、茶山の詩風と一致しており、何らかの交流の際、揮毫を依頼したと推察できる。

⑧ 岩瀬華沼(一七三二～一八一〇) 名 行言、字 子言

肥前島原藩儒。藩校稽古館けいこかんの教授。柴野栗山、頼杏坪らと親交があった。文化元年の栗山堂の詩宴にも参加しており、茶山との交流があったと思われる。江戸出府の際、墨書してもらったと考えられる。

⑨ 亀田鵬齋(一七五二～一八二六) 名 翼、字 国南

江戸の儒者。私塾には旗本や御家人の子弟が多く集まっていたが、松平定信による「寛政異学の禁」が發布されると、山本北山らと強く反対したが、門弟の多くは去ってしまったという。

後に廉塾の都講となる北條霞亭が鵬齋の塾に寄寓していたが、茶山が鵬齋と面識を持ったのは、二度目の出府時である。

「文化十一年(一八一四)九月、百川楼で開かれた書画会に遅れて向か

った茶山と早く辞した鵬齋が路上で偶然に出会った」と日記に記している。(谷文晁画「茶山鵬齋日本橋邂逅圖」は有名である)

十勝中の「魚樂梁」を墨書してもらったのもこの時期であろう。

⑩ 紫源

この人物については茶山との交流は不明であり、今後の研究に期待したい。

(六) 十勝碑完成までに約十六年の歳月

○ 四勝の標柱「松風館」「棟棠橋」「鳥語澗」「鳴玉橋」の設置は寛政十年(二七九八)。永富充国の記文により確定される。

○ 「浸翠池」「紅於徑」「魚樂梁」「垂白棚」の設置は文化二年(一八〇五)と思われる。

茶山の帰郷は文化元年(一八〇四)十一月五日で実際に建立されたのは文化二年であろう。現存する「迎碧墩」の石柱に刻まれていることから確定される。

○ 「娛論亭」の墨書は文化六年(一八〇九)には書かれていた。

「衝立」の余白部に書かれた内容からして、以前から木製扁額に書かれていた。茶山は「まだ彫刻もされていないので、拓本もない」と不平を洩らしている。

○ 「魚樂梁」の書は茶山の二度目の出府の時、揮毫してもらった。

鵬齋との初対面は文化十一年(一八一三)九月であり、帰国は文化十二年三月末なので、刻まれたのは文化十二年であろう。

以上の事から、松風館十勝碑は一度に建立されたのではなく、完成す

るまでに約十六年の歳月を要したと思われる。

最近得た情報として、茶山の日記「蝸角擣杵」かかくとうこつに次の記録がある。

「享和三年三月十五日 君推来謝転致四勝題字」

享和三年(一八〇三)には既に四勝があったことが判明するが、記述の四標名や「謝転致」の意味が不明である。「転致」は移転させたのか、石碑に文字を刻んだのかなどは不明である。今後の解明に期待したい。

(七) 松風館と十勝はどのように配置されたのか

現在松風館跡と思われる広大な土地は空き地になり、その面影はない。近くの住民に尋ねても、詳しい話を聞くことはできず、屋敷内に古井戸があり、現在も「おいしいお水が出る」という話しか聞けなかった。

山田谷は全体的に余り人の手が加わっておらず、かつての地形を保っていると思われる。ただ、灌漑用の新池が昭和十五年(一九四〇)に畑を掘削して作られた。最奥部の三池が埋め立てられ、現在は運動広場になっている。

① 位置が確認できる記述が一つだけ存在する。

先の「衝立」の記述に次のようにある

迎 碧 墩
右柴博士の書、園中十勝石標の一つなり。
(中略) 乙丑鳥語澗の北岸に刻立す、(後略)

これにより、石碑「迎碧墩」が石碑「鳥語澗」の北岸に建てられたことがわかる。

② 現在では、訪れた人々の詩や和歌から推察するしかない。松風館と十勝の様子が推察できる詩を幾首か取り上げる。

松風館即事 黄葉夕陽村舎詩 後一―二十一

箱藏古畫案堆書	箱に古画を蔵し	案に書を堆くす
却是尋常百姓廬	却つて是れ尋常	百姓の廬
爨婢摘萃呼病鹿	爨婢 萃を摘んで	病鹿を呼び
園奴激水引遊魚	園奴 水を激して	遊魚を引く
籟長松頂風收後	籟は長し	松頂風収まって後
流淨崑根凍解初	流れは淨し	崑根凍を解くるの初め
奴婢亦能知愛客	奴婢 亦た	能く客を愛するを知り
不妨騎馬到階段	妨げず	馬に騎りて 階段に到るを

案 机の事。尋常 当たり前。爨婢 爨は飯を炊く女衆。萃 うきくさ、よもぎ。激 さえぎる。籟 笛、松風のことを松籟。崑 崑岩。階段 階段

(大意)

昔の書画骨董が箱に収まっていて、机には書物が堆く積み上げられている。普通の百姓の家にそのようなものがあるのだから、まったく意外で松風館は素晴らしい。女衆がヨモギを摘んで、飼っている病気の鹿をかわいがっている。男衆は水を堰き止めて魚を飼っている。松の頂の風が収まった後も、松風の音が耳に残っている。谷川のきれいな流れが凍っていたのが解け始めた。男衆も女衆も訪れる客人をもてなす術を心得ている。馬で階前に乗り付けると喜んで迎えてくれた。

河相保之松風館同菅禮卿賦 春水

長松之下故人家	長松の下	故人家
鳴玉溪流不覺譁	鳴玉の溪流	譁しきを覺えず
傳杯更愛幽香度	杯を伝え	更に愛す 幽香の度るを
屋角微風橘柚花	屋角の微風	橘柚の花

故人 古くからの友、旧友。譁 喧しい、耳障りな。幽香 かすかな、ほのかな。橘柚 みかんとゆず、ミカン類の称。

(大意)

大きな松の木の下に、古くからの友の家がある。屋舎にあがると玉を鳴らすような泉水がちよろちよろ流れているが耳障りにはならず、快い音色を響かせている。酒を酌み交わしていると、どこからか、ほのぼのとした得も言われぬ香が鼻をくすぐる。

さて、何の匂いだらう。家の屋敷の隅の方から吹く風にのってくる。ああ、橘柚の花の匂いだな。

* この詩で頼春水は「故人の家」としているところを見ると、君推と以前から交流があったことが窺える。

* 頼春水は頼家兄弟の長男。三男春風は竹原で医師。四男杏坪は広島藩儒として活躍。茶山と頼家とは家族ぐるみの付き合い。(次男は夭死)



松風館即事 黄葉夕陽村舎詩 前三一十五

詩罷松窓夜幾更
 捲簾閑待柿歸鳴
 隣燈有影樟陰黒
 林雨將收竹氣清

詩 罷やんで 松窓 夜幾更よいくこう
 簾すだれ を捲まいて 閑しずかに柿歸しきの鳴くを待つ
 隣りんとう燈 影有りてて 樟陰しょういん 黒し
 林雨りんう 將おさに収まらんとして竹氣清ちくきし

柿歸 ホトトギス。 樟 クスの木。

(大意)

詩を吟じ終わって窓を見ると、枝ぶりのいい松が見え、夜もかなり更けているようだ。簾をまいて静かにホトトギスが鳴くのを待っている。隣の部屋の行灯あんどんの光が、楠の木をぼんやり照らしている。庭の林に降る雨もようやくあがろうとしており、竹藪から清々しい気が感じられる。



詩碑 松風館即事

③ 残された和歌より

○ 鳴玉橋ヲ咏スル西山拙斎の和歌 (『中條村史』より)

「柴橋を掛けて幾世も住ぬべし玉を鳴せる松の下水」。

○ 菅茶山の和歌 (『菅茶山の詠歌』より)

寛政四年(一七九二) 松風館庭鳴玉橋

「すむ人の友としならば谷水のとむも深き心ならまし」

④ これらの詩や和歌より、想像できること

○ 松風館は客殿(別荘)として建てられたものであること。

○ 多くの書画を収集し、和歌に通じた文化人であったこと。

○ 邸内及び周辺には客にもてなすため、養魚場があり、鹿なども飼っていたこと。

○ 松風館邸内に溪流が引き込んであり、その上に柴橋(木製の橋)が架かっていたこと。

○ 屋敷周辺や邸内に大きな松や樟、竹林があり、さらに柑橘系の樹木が植えられ、その時期には芳しい香りを放っていたこと。

○ 住込みの使用人がおり、客をもてなす術を身につけていたことなどである。

【仮説】松風館十勝は山田谷一帯に設置された

武田武美氏(菅茶山顕彰会元理事、郷土史家)は、

「松風館十勝は屋敷内だけに設けられたものではなく、山田谷一帯の風雅な地点に標識を設置したのではないかとする。例えば「魚樂梁」は山際を流れる山田川をせき止めて、養魚池にしていたのではないかなどである。

菅茶山顕彰会としてこの仮説を基に検討した結果を後述する。



山田川 松風館跡東側を流れる

二 河相君推と河相家について

(一) 河相君推（一七五七～一八一八）

宝暦七年備中国井原村旗本池田修理家の代官猪原幸右衛門の次男として生まれ、文政元年（一八一八）六十二歳で没する。名を保之、字は君推、通称を周次（治）郎、松風と号した。

西中條村河相重義の娘通知の夫として入婿となる。君推が河相家に入った頃が全盛期で、酒造業も営むなど大富豪であったという。「松風館」という客殿を建て、茶山や近隣の文人や僧侶などを招待し、詩会や月見の宴を催していた。茶山も「黄葉夕陽村舎」を訪ねてくる客と度々連れ立って訪問。君推も歓迎していたことが茶山日記や詩などに見える。

君推も和歌を能くする人物であったが、多くは残されていない。知り得た歌をあげる。

○象山献燈の背面に（『菅茶山ゆかりの拓本展』菅茶山記念館）

「やはらくる 光を古々尔 あらはへて

宇津須ともしひ 神も美そ那へ」

（やはらくる 光をここにあらわして うつすともしび神もみそなへ）

○君推の墓碑に（故武田武美氏遺稿）

「にほひくるかぜを枝折に和け入りて

とはゝやうめの花能やま佐登」

（にほいくる 風を枝折にわけ入りて とわばやうめの花の山里）

○『筆のすざび』中で「野寺の歌」として保之の和歌をとりあげている。

備後寶泉寺は野原の真ん中にある。この寺の歌会で詠んだその和歌は

「松幾木山と見るまで生そいて

野中の寺ぞふりまさりける」

（松の木が山と見間違える程生えていて野中の寺が、いつそう古刹に見える）

歌人がこの歌を見て「野中の寺は歌にしにくいものだ。この人以外にこれ程の歌を詠む人は誰もいないだろうと言った」と茶山は紹介している。

(二) 象山献燈の建立

松風館跡に現存する「象山献燈」は、君推の財力の一端を窺うことができる。この燈籠は高さが一三五cm、最大幅四十cmあり、「象山献燈」の刻銘は茶山の揮毫である。

南面 象山献燈

東面 文化丙子孟春

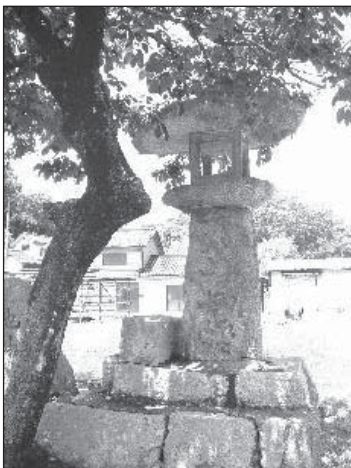
（文化十三年一月）

（二八一六年）

西面 山田谷講中

北面 河相君推の和歌

（前出 略）



【ちょっと休憩】 石灯籠について

江戸時代、金刀比羅宮は「象頭山金毘羅大権現」と呼ばれ、山容が象の頭に似ていたことから「象頭山」と呼ばれていた。明治の神仏判然令により「金刀比羅宮」となり、本尊は象頭山松尾寺に移された。

「金毘羅宮」は海の神様であるが、金毘羅神は、山に神霊が宿ると言われ、この神が山の神として信じられ、

山から里に下りて農民の春の農作業を助け、秋の収穫が終わると山に帰るといわれ、田の神様として古くから信仰されていた。

松風館跡の「象山献燈」は象頭山の

「頭」の文字を抜いていると思われる。

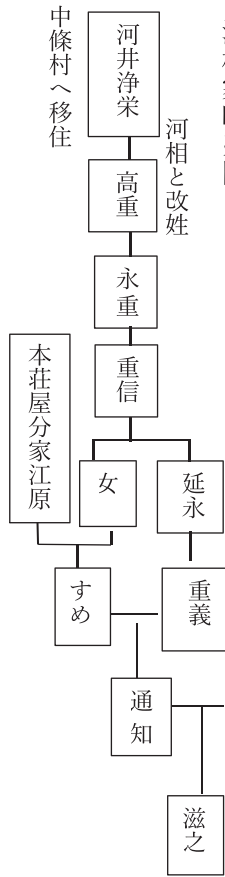
近隣では、神辺町川南国道三一二号線沿いにある。古城八幡社石灯籠、帰天神社石灯籠は菅茶山の筆によると言われる。また、府中市府中町には日本一と言われる石灯籠が建立されている。



日本一の石灯籠

(三) 河相家と本荘屋菅波家・菅茶山の関係

① 河相家略系図



河相家は君推より六代前に、備中国川相村(現芳井町)から移住してきた河井浄栄に始まる。浄栄には三人の子佐兵衛(屋号立子)が後継となり、

平右衛門(屋号岩岡)と高重が分家する。高重は山田谷に分家(屋号土居)

し、河相に改姓する。二代永重は上下陣屋の役人を務め、三代重信は庄屋職となっている。重信の女が本荘屋菅波家の分家の江原与平に嫁している。五代重義は里正の職を襲ぐ。妻は与平の娘「すめ」で、菅茶山と縁戚関係にある。重義は文化五年(一八〇八)に没す。その墓誌は茶山撰文である。

茶山と河相家との縁は、菅茶山の妹「マツ」が河相家の分家筋にあたる荒木家(福山市千田村)に嫁ぎ、弟恥庵の妻は、君推の子「組」が嫁した桑田翼叔の叔母で桑田儀右衛門の娘「阿谷」である。(武田武美氏による)

また、河相家の分家筋の千田村河相周兵衛は千田村の庄屋となり、農民の救恤と教化を目的とした「義倉」を創立した中心人物である。また「福府義倉」と命名したのは菅茶山である。

(四) 君推の子どもと絶家

君推の子は十人いたと墓誌にあるが夭死した子もおり、名前のわかる子どもは次のとおりである。

- 長男 庄右衛門滋之 後継する
- 長女 岩 甲山小川家へ嫁す
- 次女 萬 岡山平井岱の妻となる
- 三女 組 山南桑田翼叔の妻となる
- 四女 登和 世羅松本喬道の妻となる
- 次男 於菟 夭死
- 三男 浅吉 君推没年時はまだ弱冠



旧入口に建つ六地藏

君推の跡を継いだ滋之の墓には安政六年（一八五九）没とある。しかし、その後継者の墓は見つからない。

濱本鶴實氏は、『備後史談十八巻二号』に次のように記しているので紹介する。



河相家墓碑群

「土居の隠居に可愛い娘がおり、東中條村西中屋へ嫁し、子まであったが離縁となって帰り、甲山へ再嫁し、虎列拉^{コレラ}で急死し、隠居がその死骸を連れにいつて伝染し、コロリと死んで家は絶えた云々」

その後河相家がどうなったかは不明で、写真のように墓域に多くの墓が静かに建っているだけである。

平成十八年（二〇〇六）二月二日に行われた除幕の式典には、山南に嫁いだ三女組の子孫が参列していたことを特記しておく。

(五) 土居河相家墓域と河相君推の墓

河相家の墓は松風館跡から二百米ほど奥に入った山麓にある。（現在は道路端から入れる。）旧入口には六地藏が建ち、「南無阿弥陀仏 沙門慧充」と彫った大きな法界が立っている。

六地藏・法界を見ても河相家の繁栄が偲ばれる。

「慧充」とは乗如上人（湯田村寶泉寺）で、茶山と深い交流があり、後に高野山管長を務めた人物である。

君推の墓は河相家墓地の西奥にある。君推は文政元年（一八一八）七月二十日六十二歳で没している。茶山より十年早い死であった。その墓誌は茶山撰文で、君推の和歌が刻んである。（前出）

墓誌に刻まれた戒名には「成鏡院慈航智苒居士」とある。妻の墓は別にあり「教學院觀阿妙道大姉」、天保十三年（一八四二）十月十九日没とあり君推より二十二年長命であったことがわかる。

君推の戒名「成鏡院慈航智苒居士」の「英」は欠画となっている。「欠画」とは、天子又は貴人の名の漢字を書く時、憚ってその漢字の画を欠くこと。

いみなひでひと

君推の場合、後桃園天皇の諱英仁の「英」と同じなので「英」を欠画にしている。現在では、欠画など前世紀的なもので時代錯誤の感があるが、当時の思想を垣間見ることができる。なお、墓参のとき、欠画の字と当時の思想に思いを馳せていただきたい。

なお、欠画の詳細については、林多恵子氏の寄稿『菅茶山顕彰会会報第五号』にあるので参考にさせていただきたい。



河相君推墓碑

三 松風館（河相君推宅）で詠まれた詩

(一) 天明五年（一七八五）の作

天明五年三月十二日。西山拙齋、姫井仲明（桃源）頼千祺（杏坪）が茶山を訪ねる。前日には神辺龍泉寺に遊び、翌日河相君推宅を訪ねる。

河相君推宅即事分得雨字呈西山先生姫井仲明頼千祺

黄葉夕陽村舎詩 前二一十四

林亭三日東風怒

林亭三日 東風怒り

石榴曉鳴澗橋雨

石榴 曉に鳴る 澗橋の雨

轟雷一聲閃電光

轟雷 一聲 電光 閃めき

天宇如墨雲擁戸

天宇 墨の如く 雲 戸を擁す

昨遊半月烟水郷

昨は遊ぶ 半月 烟水の郷

春服朝朝飽和煦

春服 朝朝 和煦に飽き

晴川待渡楊柳汀

晴川渡るを待つ 楊柳の汀

夜館看棋桃花塢

夜館 棋を見る 桃花の塢

何事氣象斗凄慘

何事ぞ 氣象 斗 凄慘

松檜掀舞山揺撼

松檜 掀舞し 山 揺撼す

得非山靈有所索

山靈 索むる所 有りて

故作狡獪供遊覽

故らに狡獪を作し 遊覽に供するに

非ざるを得んや

三公椽筆一代宗

三公 椽筆 一代の宗

好出奇語破鬼膽

好し 奇語を出して鬼胆を破らん

林亭 東屋など風流な離れ座敷。東風 春の風。石榴 岩がくぼんだところへ水がたまつた淵。澗 谷川、谷間。轟 大きな音が遠くまで響くこと。

天宇 全体を覆う大屋根。擁す 抱きかかえる。烟 けむり、もや。煦 あたためる。塢 土手、川土手、堤。檣 くぬぎ。掀舞 掀は上げる、上がる。

強い風が大きな木や幹を揺り動かす様。狡獪 ずるがしい。遊覽 見物して回ること。三公 ここでは、西山、姫井、頼の三人。椽筆 椽はたるきの事、たるきのような筆で書いた大文章（素晴らしくてかなわないような文）

宗 本山、学問の深い大文人。奇語 珍しい発想で誰も思いつかない詩。（大意）

林亭の三日、今日は東風が怒るが如く荒れて、曉方から大雨が降り出し谷川の橋下も賑やかである。雷が鳴り稲妻が閃いている。空一面に墨を流したような暗雲が立ち込め、家を覆っている。昨日は春着を着て終日和かに暖気を楽しんだ。晴れ晴れとした気持ちの良い柳の枝が揺れる川土手で渡し舟を

待ったり、座敷で碁を打つのを見て楽しんだ。川土手には桃の花が咲き誇っている。どうしたのか、天気がちまちま悪くなり、風雨が松やくぬぎの幹や枝を揺り動かしている。これは山の神が私らが風流を求めて遊覧するのを邪魔しているのだ。三人のお方には、たるきのような大きな筆で書いたすばらしい詩心を詠んで聞かせてもらいたい。珍しい発想で誰も思いつかないような詩で暴れ神の度胆を抜いてやってもらいたい。

*（分得雨字） 詩を作る際、五言・七言なりの文字を皆で分け合つて、それを韻字にして作る作詞法（茶山には「雨」という字が当たる。二行目で雨を入れている。

中秋飲河相君推宅 黄葉夕陽村舎詩前二一十八

一輪晴照幾神州

一輪の晴照 幾神州

匹馬孤閨終古愁

匹馬孤閨 終古の愁い

頼有雲林招小隱

頼いに雲林 少隱を招くに有り

聊將吟酌答中秋

聊か吟酌を將つて中秋に答えん

山空老木千章影

山空にして老木千章の影

天近明河萬里流

天近くして明河 万里に流る

偏喜朋交無變態

偏に喜ぶ 朋交 變態無きを

年年今夕此同遊

年年今夕 此に同遊せん

一輪 十五夜の円い月。神州 俗を超えた州(くに)、欲望を捨てた汚れない居場所。匹馬 一匹の馬。孤閨 ひとり寝のねや、茶山ことで、誰もあいてにしてくれない。終古 いつまでも。少穩 自分を卑しめて相手に言う言葉。聊 ほんのわずか。吟 詩を作り声に出して詠い披露する。山空 人氣のない山、ひっそりとした山。章 大きな木を数える数詞。明河 天の川。朋交 仲よくつきあう。

(大意)

十五夜の満月の光がいくつかの国々をあまねく照らしている。たった一匹の馬が誰にも相手にされることなく、晴れない思いを抱いて一生を終えるだろう。幸いにも私のような隠者を樹々に雲がかかるとようなお座敷に招いてもらえる。酒をいただきこの中秋の名月に負けないように詩を吟じよう。山はひっそりし、たくさんの老木が生えており、天の川がだんだん近づいてきて、

どこまでも続いている。昆虫のように姿を変えないで、主人の君推さんをはじめ皆さんと仲良くつきあってもらえることが、嬉しくてたまらない。だから、毎年中秋の名月の晩は、ここで月見の宴を楽しませてもらおう。

(二) 天明八年(一七八八)の作

この年二月下旬から三月上旬に西山拙齋・道光上人らと三原・西野梅林・仏通寺などに遊び、六月に『遊藝日記』の旅に出るので、その間に松風館を訪れて詠んだと考えられる詩が「松風館即事」(『黄葉夕陽村舎詩』前三一―三五)である。(前出 13頁)

(三) 寛政二年(一七九〇)の作

二月二十五日、西山拙齋と菅茶山は河相君推宅の詩会に招かれる。

中條山下宿	中條山下の宿	西山拙齋
歛宴也佳哉	歛宴 也佳き哉	
危緑松水浮	危緑 松水に浮び	
殘紅点花苔	殘紅 花苔に点ず	
烟霞禽向伴	烟霞 禽向に伴い	
膠漆陳雷擬	膠漆 陳雷に擬す	
不管春宵短	管せず 春宵の短きを	
夢醒亦呼杯	夢醒めても 亦杯を呼ぶ	

危 高い。烟霞 靄やかすみ。禽向 名山、大河を探勝する隠士。膠漆陳
雷 固く結びついた厚い友情。管 笛の総称。

(大意)

中條山下の松風館での楽しい宴、丈の高い緑の木が池に影を映し、散った
花びらが苔の上に落ちていている。烟霞の中、庭園を散策する。それはまるで膠
漆のようにくっついて離れない友人と行動を共にしているようだ。笛など
吹かず夢のような短い春の宵から目覚めてまた杯を交わそう。

(四) 寛政四年(一七九二)の作

四月三日、頼春水が湯原温泉への湯治へ向かう途中茶山を訪ね来る。二人
は松風館に招かれる。

春水は「河相保之松風館同菅禮卿賦」の詩を詠む(前出)

【ちよつと休憩】 寛政四年は茶山にとつて大きな節目の年

この年八月、藩より五人扶持を給せられる。頼山陽撰の「茶山先生行状」
に「福山侯、林と詩を論ず。祭酒曰く、当今の詩家、まさに菅太中を以て魁
と為すべしと。侯、吏に命じて廉問せしめ、更につぶさに其の学行と兼ねて
茂状を得、始めて俸五口を賜う」とある。江戸にあつても茶山の名が聞こえ
ていたことを語るものであろう。

藩への出仕は病弱を理由に断つてはいるが、翌年には藩命で福山で漢籍を講
釈している。また、茶山は学問と塾経営に専念するため、家業を弟恥庵(圭
二)に譲っている。

(五) 寛政五年(一七九三)の作

この年、茶山は父樗平の三周忌にあたり、喪が明けたので再び詩作を
始める。八月十五日、河相君推を松風館に訪ねて仲秋の月を賞した。

癸丑仲秋十五夕既午訪松風館酒間書感二首

黄葉夕陽村舎詩 前四―三

癸丑 仲秋十五夕 既午松風館を訪う。酒間に感を書す二首。

初昏猶作雨蕭蕭

初昏 猶雨 蕭蕭 を作す

喜見狂雲漸自消

喜び見る 狂雲の 漸く 自から消ゆるを

獨坐無端思往昔

独り座して 端無くも 往昔を思えば

七年曾已曠今宵

七年 曾て 已に 今宵を 曠くする

山當新霽清偏透

山は新霽に当りて 清 偏に透る

月至殘更光轉饒

月は残に至りて 光り 轉饒し

此際余能守單影

此の際 余 能く 單影を守らんや

泥行十里叩松寮

泥行 十里 松寮を叩(たた)く

癸丑 寛政五年。既午 既に正午、昼の十二時。初昏 日没直後。蕭蕭

ものさびしい。狂雲雲が走りまわる様。曠せつかくの好機を逃すこと。

霽 晴れて清らかなさま。更 夜間を五つに分けて一更、二更・三更は夜

十二時から二時頃、残更は午前四時ころ。饒 豊かなこと。

單影 一つの影法師、一人で月を眺めること。泥行 だろんこ道を行くこと。

松寮 松風館。

(大意)

仲秋の名月を愛でようとやって来たのに、夕方になっても雨がしとしと降り続けている。やがて、うれしいことに行きかう雲が次第に自然と消えていった。一人座って思いかけず昔の仲秋の名月の事を思い起こすと、この七年ほどは、向こうから逃げてしまった。山を見ると黄昏時に降っていた雨もあがり、晴れあがって山の稜線が透き通って見えてきた。残更の時分になっていよいよ月が美しく輝き出した。この月を一人だけで見るとはもったいない。(月の美しさのわかる人と一緒に見たいものだ。)名月を見るために、泥道をはるばるやって来て松風館の門を叩いたのだから。

(六) 寛政七年(一七九五)の作

松風館	『黄葉夕陽村舎詩』前四―二十四
君家衡宇近吾廬	君が家の衡宇 吾が廬に近し
竹徑沙堤十里餘	竹徑 沙堤十里の余
綠酒尊前新畫軸	綠酒尊前 新画軸
鳥皮几上古農書	鳥皮 几上 古農書
垂蘿場圃鳥争果	垂蘿場圃 鳥果を争う
落葉池亭童喚魚	落葉池亭 童魚を喚ぶ
不妨事隙時來往	妨げず 事隙 時に來往するを
莫言多病故人疎	言う莫れ 多病故人疎しと

衡宇 冠木門と家。廬 いえ、そまつな小屋。竹徑 竹林の中の小道。

沙堤 砂の堤、川の土手。綠酒 緑色の美酒。尊 酒だる。鳥皮几 孫登が杜甫に贈った鳥羔(鳥や子羊)の皮で包まれた机。これより鳥皮几の名が始まる。蘿 つた。場圃 畑、穀物を処理する所。事隙 争いごと。(大意)

松風館と私の家は近い。竹林や川の土手を辿って十里。ここには緑色の美味い酒だるや買ったばかりの畫画、鳥皮几には古い農字書が置いてある。つたが覆った取り入れ場では、鳥が穀物を争って食べている。落葉が浮かぶ池では子どもが魚を呼び寄せている。我が家で争いごとが起きて、時々訪ねることを嫌がらずに迎えてほしい。私が多病だからとて、親しい人も訪ねないとは言ってくれるなよ。

(七) 寛政九年(一七九七)の作

三月四日、京都下加茂社祠官梨木祐為が茶山を訪ねてくる。『備後史談第十四卷七・八号』によると、梨木祐為が残した神辺訪問の記録にある。

〔三月〕 四日 陰晴
 發福山、至神部驛、訪菅多仲、(從福山至神部、一里餘)詠物名かむのへ」
 この時詠んだ詩が『福山志料』卷十五「安那郡川北村」の部にもみられる。
 さらに、梨木祐為は数日を茶山と共に過ごしている。
 〔五日〕 快晴
 河相周次保之 別莊號松風館之由、請愚詠」とあり、句を詠む。
 「かよひくる琴の音ならてをのつから千代をしらふる宿の松風」

(八) 文化六年（一八〇九）の作

三月十四日、岡山藩藩士小原業夫と水田福州、山内梅巖が茶山を訪ねてくる。二十日、茶山は彼らを案内して松風館に遊んだ。

與業夫諸子訪松風館 『黄葉夕陽村舎詩』前八―十七
 槐雨纒収日正斜 槐雨かいう わずかに収まりて 日正に斜なり
 麥寒將退鳥初譁 麥寒ばくかん 將に退かんとし 鳥初めてかまびす譁し
 徂春有脚追難得 徂春そしゅん 脚有りて追うも得難し
 導客山村探晩花 客を導いて 山村 晩花もとを探む

麥寒 麦も凍る寒さ。 徂春有脚 春が足早に去っていく。

(大意)

槐に降る雨も収まって、夕暮れ時になってきた。麦も凍るような寒さも通り過ぎ、鳥たちの声もかまびすしい。行く春は足早に去り、追うことも難しい。そんな中、小原業夫と諸氏を案内して中條の咲き遅れた花を求め探索しよう。

* 小原業夫 名は正修、字が業夫で梅坡と号した。備前岡山藩の世臣で詩や書画を善くした。のちに『黄葉夕陽村舎詩』の序文を書いた人物。水田福州、山内梅巖も岡山藩士であったらしい。

(九) 文化八年（一八一二） 頼山陽作

茶山日記に「文化七年三月二十八日、晴 與子成恵甫訪松風館」とある。この時山陽が詠んだ詩が『頼山陽全書 詩集卷七』に二首残されている。

茶山は文化六年（一八〇九）十二月、頼山陽を都講に迎える。外出時には、都講に迎えた子成（頼山陽）と弟子恵甫（佐谷恵甫、豊後の人）を度々伴にしたという。しかし、山陽は文化八年二月（閏）六日、茶山の期待を裏切り京都に出奔したので文化七年の作と考えられるが、頼山陽詩集には文化八年となっている。

松風館 二首 頼山陽詩集 文化八年作
 山窓剪燭好従容 山窓 燭を剪りて 従容 好し
 茶鼎鳴時雪意濃 茶鼎ちやてい 鳴る時 雪意濃く
 留宿今朝更乘興 宿に留まって今朝更に興に乗ぜんとし
 起看六出壓簷峯 起きて 六つの出を看れば 簷峯えんほうを 圧る

従容 ゆったりとくつろいでいる様。鼎・かなえ。壓 おさえる、おす。簷 ひさし。六 明け六つ、日の出三十分前。

(大意)

山の庵の窓から眺める景色は、灯りを消してみるとゆったりとしている。茶釜が湯けむりをなびかせて鳴り、雪が段々強く降り出した。この景色がどう変化するかと興味が湧いて、朝六つ時（五〜六時）起きてみると、朝日が峰をおさえるように輝いていた。

松風館 (二)

愛客連宵敷引觥	客を愛し	連宵敷	觥を引く
雪為飛絮拂山楹	雪は為す	絮を飛ばし	山楹を払う
誰知道蘊多才技	誰が知らん	道蘊の才技の多きを	
絃撥聲交簷溜聲	絃撥の聲	簷溜の声に交じるを	

數 しきりに。觥 さかづき。絮 わた。楹 はしら。絃 琴など弦を張った樂器。撥 はねる、はじく。簷溜 のきから落ちる雨だれ。

(大意)

松風館の主人は來客をもてなし、毎晩杯を交わす。外は雪が綿を飛ばすように山門に降り積もっている。君推の才覚はあの道蘊のように豊かであり、琴を演ずる音が軒から落ちる雨だれと混じって聞こえてくる。

* 道蘊 二階堂貞藤、法名が道蘊。鎌倉幕府末期の武将。和歌・儒学に通じ、当時幕府随一の賢才といわれ、幕府滅亡後も才学を惜しまれ、許されて建武政府の役人になったが、後、謀反を疑われ処刑された。作庭師としても著名。山陽は君推を道蘊に喩えている。

* 佐谷惠甫 豊後筑前秋月藩医箕浦東伯の子 生没年は不明
文化六年末(一八〇九)から文化八年(一八一二)閏二月まで一年余にわたり塾生。「送佐谷惠甫歸秋月」の詩(『黄葉夕陽村舎詩』後三十三)が載せられている。

(十) 菅茶山ゆかりの中条地図



茶山が中條へ辿る道は、二通りの道があったと推定される。

① 丁屋道 (Chōya-michi)

廉塾〜掛の橋 (大仙坊橋) 〳 豊久保〜丁屋 (中陣池) 〳 山田谷 遍照寺など

② 箱田道 (Hakoda-michi)

廉塾〜掛の橋 (大仙坊橋) 〳 秋丸〜箱田 (箱田池) 〳 山田谷 遍照寺など

菅茶山と中條村

一 茶山と文人サロン「中條」

菅茶山がよく訪れたのが河相君推宅（松風館）と遍照寺^{へんしょうじ}である。本題に入る前に、当時の中條について述べてみたい。

『神辺町史』（社会教育課神辺町史刊行係発行）には次のようにある。

元禄十年（一六九七）福山藩四代藩主水野勝種の急死により二歳の勝岑が第五代藩主となるが、元禄十一年（一六九八）に死去し、水野家は断絶となる。元禄十三年（一七〇〇）岡山藩検地で十五万石余の石高とされ、出羽国山形藩松平忠雅が十万石で入封する。この時、福山藩領の五万石が幕府領となる。近隣では、西・東中条村、三谷村が幕府領となる。この村々が福山藩領に復帰するのは、嘉永五年（一八五三）阿部正弘が一万石を増されたことによる。

幕府領は概ね上下（府中市上下町）の代官所が管していたようであるが、初めは笠岡代官所が後には、龍野、浜田、大森などの代官所も支配していた

幕府領は天領と称し大名領を私領とい

うのに比し、概に名称の上に置いて優位に置かれた。幕府領は租率において総体的に軽かったようである。また、経済面についても緩やかなようである。福山藩は幕末期に倭約令を出し、櫛、筭、簪などの金銀等のものや蛇の目傘の使用を禁じたが、隣接の箱田村ではそのようなことがなかったため婦女子をして羨望せしめたと伝えられている。



番所跡碑 三ツ池堤

黄葉夕陽村舎詩や茶山日記には、度々訪れた近隣の場所や人物、同行した人物や詩友の名前が見受けられる。主なものをあげる。

西・東中條村	河相君推（松風館）、大空上人（遍照寺）、河相子蘭、松井子璐、篁大道、寒水寺、圓通寺、廣山寺
湯田村	乗如上人（寶泉寺）
川北・川南村	風靈上人（光蓮寺）、菅波武十郎（東本陣）、藤井暮庵、西福寺、東福院、龍泉寺、萬念寺
御領村	如實上人（国分寺）、明正寺

中でも黄葉夕陽村舎詩に多く詠まれているのが、先に述べた河相君推（松風館）と大空上人（遍照寺）である。さらには、河相子蘭、松井子璐、篁大道などの弟子や詩友がおり、茶山にとって中條はかけがえのない場所であったことが想像できる。中国の歴史や文学に通じていなければならぬ漢詩が、僧侶や農民（庄屋）など中條の人々に親しまれたということは、当時としては異例の事ではなかったと思われる。つまり、水準の高い教養人たちが住んでいた土地であったことが窺える。

さらには、茶山は訪ねて来る文人たち、西山拙齋、道光上人、頼春水、頼杏坪、姫井仲明、永富充國、佐藤子文、小原業夫などを中條へ案内している。その迎賓館の役割を果たしたのが河相君推の「松風館」であった。彼らは全国の文人たちとも交流があった。この時代、中條に文化の華が開いていたと言える。

(一) 遍照寺と大空上人

『黄葉夕陽村舎詩』中で松風館に次いで多くの詩が詠まれている。遍照寺が七首、住職大空上人に関するものが五首見受けられる。

遍照寺は西中条にある真言宗の寺院で茶山詩にある「黄龍山」はこの寺の山号である。本堂の前に立つ記念碑の説明文には次のようにある。



黄龍山遍照寺

享祿二年（一五二九）建武の中興で中条村地頭職に深水菖蒲山城主真瀬（さなせ）氏直系の出雲守信正により、現在地に遍照寺が建立される。当初は興福寺と云う。天文七年（一五三八）真瀬氏落去の後再建され遍照寺と号す。初代住職は宥朝上人、以降の上人の上人法印職に就任される方も多し。享保十七年（一七三二）旧本堂が建立される（宥智上人）。以後、約二百七十年聳立す。寛政元年（一七八九）玄道（大空）上人、四十四歳にして亡くなる。菅茶山と親しく交友ありて遍照寺にしばしば来訪す。（後略）

遍照寺への道は、現在は車で楽に登れるが、麓から急な山道を幾たびか折れ曲がりかなり高いところにある。その参道沿いには谷川が流れ、大きな岩や木々が点在する。茶山はこの遍照寺に度々登り大空上人と詩作に耽ったり、吟友達と月見宴を催すなど楽しい時を過ごしている。

大空上人は名を玄道といい、大空はその字である。大空上人についての詳しい資料を管見していない。茶山詩集や茶山日記や「菅茶山と遍照寺及大空上人」（猪原薫一氏、『備後史談第一巻二号』）などから推察すると、生年は延享二年（一七四五）、没年は寛政元年（一七八九）であることが『茶山日記』からわかる。

文化二年（一八〇五）五月十八日 晴

招諸子於西福寺作和歌 祭大空上人十七回忌題往時如夢

また、遍照寺に住すること約二十年、同寺を大了上人に譲り、高野山某寺へ還ったと言われている。茶山との交流は、茶山が遍照寺を訪れる以外にも、安永八年（一七七九）共に西山拙齋（備中鴨方）を訪ねたり、天明四年には、恵充上人（湯田村寶泉寺）と共に重陽の節句（九月九日）に「登高」して詩を詠んでいる。また、天明八年（一七八八）六月六日茶山が宮島への旅に出る際には芦田川畔まで送っている。

大空上人がどのような詩を詠んだかは不明であるが、本堂を見下ろす歴代上人の墓域に一基の墓石がある。そこには「法印玄道」とあり、周囲に次のように印してある。『備後史談第一巻二号』から引用する

僧房寂莫倚雲端	僧房	寂莫として倚雲の端
山瘦林疎觀歲闌	山瘦	林疎 歲闌を觀る
間座攤書燈火下	間座し	攤書 燈火の下
五更風雪過窗寒	五更	風雪 窓寒を過る

寂莫 ひっそりとしても寂しい、白居易の長恨歌にあり。倚 よりかかる。歳闌 年の暮れ。攤書 書物を開く

(大意)

僧房はひっそりと山にかかる雲にもたれかかるように建っている。この時期になると木々の葉は落ち、山は細り林はまばらになり年の瀬の近いことを知る。静かに座って燈火のもとで書物を開く。気が付くともう五更(午前四時)になって、吹雪が寒々と窓を打っている。



大空上人招魂碑



歴代上人の墓碑

(二) 河相子蘭 (一八二八)

河相君推の親戚筋にあたる大坊河相家に生まれる。名は國香、字は子蘭、号を靜香、喜多(太)治と称する。豪農で里正。母は松井子璐の実姉。茶山の死の翌年文政十一年没。大坊古墳の上に墓がある。

(三) 松井子璐 (一七五三～一七八〇)

宝曆三年、西中條高居の大庄屋に生まれる。名は宝、号は春蕙、子璐は字。幼児期より学問に親しみ、医学を志していたが、安永九年二

十八才の若さで病没。姉が河相子蘭に嫁いでおり、子蘭とは甥と叔父関係にあたる。茶山より五才年少で弟子であり、友人であったのではないだろうか。『黄葉夕陽村舎詩』の中に子璐の名前が見られるが、詩などの作品は管見しない。

(四) 篁^{たかむら} 大道 生年、没年とも不明

名を之直、高村を修して篁と称した。字を大道、蘭山と号した。中條出身で神官の子と言われているが詳しくは不明である。詩をよくし、茶山の弟子か友人であろう。

墓は中条八幡宮門前の道路を挟んだ場所に建っている。



篁大道墓碑



河相子蘭墓碑



松井子璐墓碑

二 遍照寺を訪ねたり、中條の詩友と詠んだ詩

(一) 安永二年～三年(一七七三～四)の作

茶山が京都遊学を繰り返していた頃、松井子璐と河相子蘭も京都に遊学していたと推察される。茶山詩の中に、共に遊んだ詩も見える。

次子璐月夜泛琵琶湖韻 子璐 月夜琵琶湖に泛べるの韻を次ぐ

黄葉夕陽村舎詩 後二十

天女祠前湖月清

天女祠前 湖月清し

湖心乗月棹空明

湖心 月に乗じて空明に棹をさす

風來波浪生哀響

風来つて波浪哀響を生じ

舟在琵琶絃上行

舟は琵琶 絃上に在りて行く

天女祠 天女を祀った祠。空明 すんだ水中に映える月影。
(大意)

良夜の湖に惹かれ、天女祠前を舟で行く。湖の中ほどに出るころには、月がいよいよ澄んで、櫓を操るごとに銀の波がゆれる。ふいに風が起つて舷をたたくもの悲しい水音を聞いていると、やがて舟は琵琶の絃の上を奏でながら進んでいるかのようだ。



西中条高居に建つ詩碑

* 下記の写真は故松井義典氏が高居に建立された詩碑一基。

裏面に「安永二年（一七七三年）琵琶湖舟遊京洛清遊の節 菅茶山 先生二十六歳 松井子璐二十一歳なり」と刻まれている。

時子璐叔姪東遊

時に子璐 叔姪東遊す 黄葉夕陽村舎詩 集外

村居無伴日相求

村居 伴無く 日に相求む

喜與群賢此宴遊

群賢と與に此れ宴遊するを喜ぶ

繞砌輕煙花影亂

繞砌す 輕煙 花影 乱れる

隔簾古木鳥聲幽

簾を隔つ古木 鳥聲 幽なり

大杯令行誰堪罰

大杯を行ら令む 誰が罰に堪えんや

窄韻知難還欲闔

窄韻の難きを知り 還闔せんことと欲す

二阮今朝醉何處

二阮今朝 何処に酔う

春深京洛酒家樓

春深き京洛酒家の樓

群賢 多くの文化人。繞砌 繞はめぐらす、砌は庭、軒下の石畳。
窄 せばめる。闔 くじ(籤)。二阮 竹林の七賢の阮籍と阮咸を子璐と子蘭になぞらえている。
(大意)

田舎住まいは話し合える友人もなく、日々相手を求めている。ところがここ都は文化人も多く、一緒に宴席に遊ぶことができ嬉しい。簾を隔てた庭の古木に囀る鳥の声がかすかに聞こえてくる。宴たけなわにもなれば大杯が回ってくるが、果たして飲み干すことができようか。引き当てた韻字は字数が少なく詩を作るのが難しい。もう一度籤を引くことができないうか。二阮(子璐・子蘭)は今日何処で飲んでるのだろうか。春も深まる京の料亭の離れ座敷あたりだろうか。

(二) 安永七年(一七七八)の作

茶山は永富充國(五島藩儒)、篁大道、松井子璐、河相子蘭、桑田元孝(備後国福田村)と中秋に遍照寺大空上人を訪ねる。この時詠まれた茶山の詩は黄葉夕陽村舎詩には収録されていない。しかし同行者の詩が「岡鶴汀(備中倉敷の人)の遺篋から発見された」と『備後史談十巻八号』で明らかにされた。その詩を取り上げる。

中秋登遍照寺作	篁之直(大道)
檐角雨愈洒	檐角に雨愈洒ぐ
病魔秋更存	病魔秋更に存す
昨宵看月約	昨宵看月を約す
今日忘憂樽	今日は憂いを忘れる樽
峰語鬪苓客	峰は語る苓を鬪す客
谷鳴偷栗猿	谷に鳴くは栗を偷む猿
論詩講殿外	詩を論ずる殿外の講
偏恨晚暉昏	偏に恨む晚暉の昏を

檐 ひさし、のき。酒 あらいきよめる。病魔 人体にとりついて病気を起こさせる魔物。樽 酒だる。苓 草の名、みみなぐさ、おちぶれる。鬪 切る。殿外 寺院の外。晚暉 夕陽の光。

(大意)

本堂の庇に降る雨が、ますます強くなる。病気が人にとりつくような嫌な秋がやってきた。昨日の夕方、観月会を催そうと相談していたのにこの雨で残念だ。しかし、その憂いを忘れさせる酒樽が準備されている。周りの山々は、落ちぶれて軒先に集うような客だという。谷には猿たちが栗の実を取りにやってきている。集うものが詩を詠ずるのはお寺の外である。残念なことにだんだん暗くなってきた。

中秋登遍照寺作	河(相)子蘭
提筴提燭問林邱	筴を提え燭を提え林邱を問う
黯澹高天玉露秋	黯澹たる高天は玉露の秋
万里雲烟鳴雁過	万里の雲烟 雁は鳴き過ぎる
一支潤道暗泉流	一支の潤道に 泉流は暗し
酒肴誰具知微術	酒肴 誰か知微の術を 具える
賦筆空添希逸愁	賦筆は空しく 逸愁を添うを 希う
環坐通宵聽點滴	環坐して通宵し 點滴を聴く
談論不羨庾公樓	談論 羨 ず 庾公樓

筴 杖。黯澹薄暗くて深い。高天よく澄んだ空。玉露香氣と甘味。万里 遠く隔たっていること。知微 目立たないようなおもてなし。賦筆 詩歌をつくる。點滴 雨だれ。庾公樓 晋の庾亮が江洲の鎮であった時建てたものという楼、遍照寺の高殿をなぞらえている。

(大意)

杖について、提灯をともし林の中の丘を登ってきた。暗くて深い色の

空は、いい香りがするようだ。辺り一面に雲が立ち込め、雁が鳴きながら飛んでいく。脇を流れる谷川の流れは暗くてよく見えない。観月会のための酒肴の品々も目立たないように準備されている。詩が詠めないようなことにならないことを願うばかりだ。みんな輪になって座り、雨だれの音を聞いて、ワイワイ騒ぎながら小川の辺りの高殿の庇の下で、おしゃべりを楽しんでいる。

同遊する永富充國、菅茶山、桑田元孝の詠んだ詩は、『備後史談第十卷八号』「詩草一葉」に詳しい。

(三) 天明二年(一七八二)の作

<p>歳杪寄大空師</p> <p>荒歳村居事亦紛 隣閭警盜諜宵分 遥知姑射峰頭月 寺寺經聲咽白雲</p>	<p>歳杪 大空師に寄せる</p> <p>黄葉夕陽村舎詩 前一―二十一</p> <p>荒歳 村居 事亦紛たり 隣閭 盜を警めて 宵分に諜ぐ 遥かに知る 姑射峰頭の月 寺寺の經聲 白雲に咽ぶ</p>
--	--

歳杪 年の暮れ。大空師 大空上人。荒歳 不作の年。閭 村里。紛まぜかえず、物騒な。宵分 夜半。諜ぐ 騒ぐ。姑射峰 仙人の住むといふ峰、ここでは高野山。

(大意)

今年は飢饉で村里は物騒なことだ。隣村では泥棒の警戒に出てこの夜中に騒いでいる。はるか彼方の姑射峰の上にはかかわりなげに月がかかっている。寺々の読経の音が白雲にむせぶように聞こえてくる。



詩碑「歳杪寄大空師」

* 詩碑裏面に「黄龍山遍照寺釈秀傳老師秘藏書」とあり、この詩は一幅の軸として遍照寺に遺されている。

<p>空上人見訪</p> <p>惠休才思人誦 支遁山心自知 流水孤雲觀世 鳥言樵語參詩</p>	<p>黄葉夕陽村舎詩 前一―十六</p> <p>惠休の才 思人誦す 支遁の山心 自から知る 流水 孤雲 世を觀る 鳥言 樵語 詩に參わる</p>
---	--

空上人 大空上人。惠休 宋の高僧、沙門惠休。思 したう。支遁 晋の高僧、支研山に隱修する。孤雲 一片の流れ雲。樵語 きこりの話し言葉。

(大意)

大空上人とお会いするにつけ、人々が沙門惠休の才能を称えたり、晋の高僧支遁が山を愛した境地が感じられる。流れ行く水や一片の雲を通して世の中を觀たり、鳥の声や樵夫の囁きが詩に加わってくる。

(四) 天明三年(一七八三)の作

茶山は前年に妻が亡くなり、すでに、叔父高橋慎庵、弟汝梗を亡くしている。天明期になると大飢饉が始まり、さらに東海地方に地震が、六月には福山地方に大洪水があり、多くの死傷者と損害を出す。さらに七月には浅間山の噴火が重なり、全国的に一揆が勃発するなど世情不安が広がり始める。

子推子重空公見訪分得韻寒 黄葉夕陽村舎詩 前二一

雨後西疇泥未乾

雨後の西疇 泥未だ乾かず

好將農隙逐清歡

好し 農隙を將つて 清歡を逐はん

鳥語爐鳴呼睡醒

鳥語 爐鳴 睡を呼んで醒まし

孤雲流水與心寬

孤雲流水 心ととも 寬なり

留客山堂憐晝永

客を留めて 山堂 昼の永きを憐れみ

惜梅村酒賀春寒

梅を惜しみて 村酒 春の寒さを賀す

此中自有真遊在

此の中に 自から真遊の在る有り

不羨吹笙駕彩鸞

羨まず 笙を吹いて 彩鸞に駕を

疇 うね、田。 農隙 農閑期。 爐鳴 茶湯の釜鳴りの音。 山堂 山里の住居、茶山の自宅。 羨 うらやむ。 吹笙 周の靈王の子晋は笙の名手で鳳凰の鳴き声を出すことができたと言う。 のち崇高山に登り、仙人になったという伝説。 彩鸞 呉の美人、虎に乗って仙人になったという伝説。

(大意)

雨上がりの西の田畑はたっぷり水を含んでいる。さあ、農閑の合間に風雅を求めて出かけよう。外では鳥の声、内では茶釜の鳴る音が眠気を覚ましてくれる。一片の雲、一筋の流れを見ると心がのびやかになってくる。この山家に客を留めて春の日永を楽しく暮らし、梅の散るのを惜しんで地酒を汲みながら早春を讚える。こうして自然の懐深く尋ねる中に真の遊びの楽しみがあるものだ。昔、笙の名手晋や才色秀でた彩鸞が人間界を捨て幸を求めようなことは羨ましいとは思わない。

* 子推 河相君推。子重 桑田元厚。空公 大空上人

初秋、道光上人(出雲国平田法恩寺住職)の訪問を受けた茶山は、七月十五日川北村の西福寺に赴き満月を見ながら詩作に興じた。翌十六日、二人は遍照寺に大空上人を訪ねる。

七月十六日同道光上人登遍照寺途中

七月十六日道光上人と登る遍照寺途中

黄葉夕陽村舎詩 前二一四

黄昏尋寺入松栢

黄昏 寺を尋ねて 松栢 に入る

雲濕衣衫水鳴屐

雲は衣衫を湿おし 水 屐に鳴る

不有月光能引人

月光 能く人を引くに有らざんば

何知臥虎是奇石

何んぞ知らん 臥虎 是れ奇石なるを

黄昏 たそがれ。栢 常緑樹の総称 かしわの木。 杉 衣服 下着。 屐 木製の履物、下駄。 臥 ふす、横たわる。

(大意)

黄昏時。遍照寺を尋ねて松や栢の木の間に辿ると、お寺に雲がかかって着物がじっとりしてきた。足元では谷川のせせらぎが聞こえてくる。やがて月が出て、人や物がはつきり見えるようにならなければ、道端に怖い虎が臥せているのか、珍しい形をした岩が虎に見えるのかよくわからない。

送大空上人之高野山 大空上人を高野山に之くを送る

黄葉夕陽村舎詩 前二―四

舊房何處鼎臺陰	旧房 何れ処ぞ	鼎臺の陰
路入層雲獨自尋	路は層雲に入りて	独り自ら尋ぬ
魑魅語聞杉影暗	魑魅語 聞こえて	杉影暗く
麀麀跡在石根深	麀麀 跡在つて	石根深し
齋過衆寺籠山靄	齋過ぎて	衆寺 山靄を籠め
講罷群僧散聲音	講罷んで	群僧 聲音に散ず
方外原來無物累	方外 原來	物累無し
也知幽境配禪心	也た知る	幽境に禪心を配するを

鼎臺 高野山の別名。魑魅 ばけもの、高野の山深きをいう。麀麀 雌雄の鹿。齋 食事。磬 中国古代の打楽器、石や玉を吊るして打ち鳴らすもの。方外 儒教以外、法内に対する語、仏教をさす。物累 世事書物へのしぼり、仏教は元來脱俗・出世間を説く。禪心 仏語、心を静めて真理を悟る、高野山という幽境に大空上人の禪心を取り合わせる意。

(大意)

上人の住持していた高野の旧房はどのあたりでしたか。かつて私は層雲の中を登って独りお参りしたことがある。生い茂る杉林は昼なお暗く化け物の声でも聞こえてきそうで、雄鹿雌鹿の足跡が石を深くうがって木々の根が露出した道のあちこちにあった。寺々では食事が終わってもやがたちこめ、講説が終わって僧侶たちが磬の合図でそれぞれの房へ散って行かれる。それは規則正しく行われ澄ましたものだった。仏教ではもともと、脱俗を説かれるだけあって俗塵を絶った高野の聖域であった。こうした所へ還っていかれるあなたの禅心は、一層光明を加えることでしょう。

【ちよつと休憩】 茶山の政治批判詩と拙齋

茶山の「政治批判詩」は、かけがえのない友人であり、畏敬の念をもって師とも仰ぐ西山拙齋の存在が大きい。拙齋は備中鴨方の人。名は正。二人は度々互いに行き来した。

「政治は幕府ではなく、天皇が行うべきである」という拙齋の考え方に強い影響を受け、「閑谷」「有鳥三首」「龍盤」「窮隣」「丁屋路上」等の詩が『黄葉夕陽村舎詩』前編に見られる。他にも政治批判詩を

詠んでいるが、頼山陽の意見を容れて「幕府の咎め」に触れそうな政治批判詩は『黄葉夕陽村舎詩』には掲載していない。



西山拙齋画像
鴨方町教育委員会発行

(五) 天明四年（一七八四）の作

登高同空充上人賦 黄葉夕陽村舎詩 前二一十一

登高 空（大空）充（惠充） 上人と共に賦す

大野秋容入酒觴 大野 秋容 酒 觴 に入る

登高携客正斜陽 登高 客を携え 正に斜陽

賞心且作須臾樂 心を賞して 且 須臾の樂を作す

世態難逃日夜忙 世態 日夜の忙より 逃れ難し

遠水忽明疎雨外 遠水 忽ち明るし 疎雨の外

孤巒迴出暫雲傍 孤巒 迴かに出ず 暫雲の傍

人生幾得好重九 人生 幾ときか 好重九を得ん

紫菊丹萸依舊香 紫菊 丹萸 旧に依つて香し

空 大空上人。 充 寶泉寺乗如上人。 酒觴 酒杯。 須臾 しば

らくの間。 世態 世相。 疎雨 あらい雨。 巒 ちいさくどがっ

た山。 暫 わずかな間。 重九 重陽の節句（九月九日）。 萸 ぐみ。

（大意）

広大な野の秋の景色が酒杯に映る。重陽の節句に客と共に登高すればちようど夕日が斜めにさしている。景色を愛でる風流な心はつかの間の楽しみとなる。しかし、この世の日々の忙しさからは逃れることはできない。俄雨がやんで、遠くの水は忽ち明るくなり、ぽつんと小高い山がはるか向こうの雲の傍らに見えている。人生のうちには

何度も重陽の節句を迎えるが、紫の菊や丹色のぐみも昔と変わらず香しいことである。

(六) 天明五年（一七八五）の作

松風館の項で「天明五年三月十二日。西山拙斎、姫井仲明（桃源）頼千祺（杏坪）が茶山を訪ねる。前日には神辺龍泉寺に遊び、翌日河相君推宅を訪ねる」と述べたが、この中條への道中で四人が連歌を作っている。

各中條山聯詠 菅茶山書

林月印池風度松 惟柔 林月池に印し 風は松を度る

晚鴉歸處綠重重 元哲 晚 鴉の歸る所 綠重重

紅雲背指菅遊地 晋帥 紅雲 背指す 嘗つての遊地

認得黃龍山寺鐘 正 認得す 黃龍山の寺鐘

出典 『菅茶山とゆかりの人々』菅茶山記念館

（大意）

林の中にある月は池に映り、風は林の中を通り過ぎていく。夜鴉の帰るねぐらは緑に幾重にも重なっている。夕焼け雲は今日遊んだ所を指している。そんな時に黄龍山遍照寺の鐘が鳴るのに気がついた。

* 惟柔 頼杏坪 諱は惟柔、字は千祺。通称が杏坪。安芸竹原出身で頼春水の末弟。広島藩儒、後に三次地方の郡奉行などを務める。山陽道を通るたびに茶山を訪ねる。茶山墓碑の撰書を委ねられている。

* 元哲 姫井桃源 名は元哲。字は桃源。備中鴨方の人で拙斎の親友で、茶山と年齢が近いこともあり頻繁に交遊があった。岡山藩儒となり閑谷学校を司った。

次の「所見」の漢詩は「乙巳」とあり天明五年作とわかる。茶山日記によれば、「七月十五日 黄葉夕陽村舎で友人」と、「十六日には福山で牛海（備後福山の修験者）」を訪ね詩を詠む。さらに、八月十五日「中秋飲河相君推宅」という七律をよんでいる。この詩の前にあるのが次の詩で、月を求めて遍照寺に登ったことがわかる。

所見 黄葉夕陽村舎詩 前二一十八
 登山待月生 山に登りて月の生まるるを待つ
 夕陽紅未衰 夕陽 紅 未だ 衰 えず
 上上身漸高 上り上りて 身は 漸く 高し
 月在歸禽背 月は 歸禽の背に在り
 歸禽 ねぐらに帰る小鳥

(大意)

山に登って名月が出るのを待つ。夕日がようやく沈みかけたが、まだまだ明るい。遍照寺への参道を登ってようやくお寺に到着すると、名月はねぐらに還る鳥の上に見えている。



遍照寺本堂と庫裏

(七) 天明六年(一七八六)の作

同道光上人登黄龍山分得一字 黄葉夕陽村舎詩 前三一七
 松風謾謾雲行疾 松風 謾 謾 雲 行くこと 疾し
 今夜陰晴占應吉 今夜の陰晴 占へば 吉なるべし
 秋林聲應童剥棗 秋林 聲は童の 棗を剥に 応じて
 晚厨香迸僧煨栗 晚厨 香 迸り 僧 栗を 煨る
 起上西岳望南天 起つて 西岳に上り南天を望めば
 遥波如杯鴉背出 遥波 杯の如く 鴉背より 出ず
 勝處隣鄉來幾回 勝處 隣郷 來ること 幾回
 幽期多在忙中失 幽期 多くは忙中に在りて 失す
 龍門臥雲思杜二 龍門 雲に臥して 杜二を 思い
 虎溪步月伴靈一 虎溪 月に歩みて 靈一を 伴う
 喜君再遊約不違 君が 再遊の 約を 違わざるを 喜ぶ
 醉尋舊題看載日 酔いて 旧題を 尋ねて 載日を見る

謾謾 松風の声。棗 なつめ。煨 うずみ火で焼く。岳 岩。勝處 景色のすぐれた所。杜二 杜甫。龍門 河津にある山峡、龍門の言葉の語源。虎溪 廬山東林寺の前にある。靈一 一つの心の意。杜二 に対応したもの。載日 記載した日。

(大意)

松風が謾謾と吹いて雲の流れが速い。今夜はきつと晴れて月が見られ

るに違いない。秋の林では棗が熟れて、それを打ち落とす童の声が響き、晩の台所では僧が栗を埋火で焼いておりここまで香が届いて来る。起きて西にある岩に登り南の空を眺めれば、遙かな山並みが飛ぶ鴉の背の上に見えている。この隣郷にある遍照寺へは幾度もやって来ているのに、私は多忙でこの素晴らしい景色をじっくり味わえないでいる。龍が天に昇り雲に臥す中国の杜甫を想い、月夜に虎溪を歩いて僧靈一を伴として味わい深い話をしよう。あなた（道光上人）が再びやってくるという約束を破らなかつたことがうれしい。酔って昔作つた詩を思い出してその日付を辿ってみよう。

(八) 天明七年（一七八七）の作

百姓一揆もおさまり、詩友と近隣を吟行している。

黄龍山	黄葉夕陽村舎詩 前三—十二
來時望衆峰	來時 <small>らいじ</small> 衆峰 <small>しゅうほう</small> を望めば
奇絶令人躍	奇絶 <small>きぜつ</small> 人を躍 <small>おど</small> ら令む
來顧來時路	來 <small>き</small> たつて 來時 <small>らいじ</small> の路 <small>かえり</small> を顧みれば
郊原亦不惡	郊原 <small>こうげん</small> 亦 <small>また</small> 惡 <small>あ</small> しからず

奇絶 素晴らしい絶景。 郊 町はずれ、くに境。

(大意)

遍照寺に登って来る時、まわりの山々を眺めると、その景色は人を寄せつけないほど素晴らしく、人を踊りあがらせるものである。遍照寺ま

で登ってきて、今来た道を振り返って見下すと、神辺平野の田圃の眺めも悪くはない。

(九) 寛政十年（二七九八）の作

安永七年の項に記したように茶山は永富充國、松井子璐、河相子蘭らと遍照寺を訪ねた。この年、永富充國と再び共に訪れて詩を詠んでいる。



詩碑「黄龍山呈充國」

黄龍山呈充國 黄龍山 充國に呈す

充國遊此距今二十年矣當時唱和者篁大道大空上人松井子璐諸人今皆不在獨河子蘭及余存

長松大石舊林邱	長松 <small>ちようまつ</small> 大石 <small>だいせき</small> 旧林 <small>きゆうりん</small> 邱 <small>きゆう</small>
二十餘年感壑舟	二十餘年 <small>にじゅうねん</small> 壑舟 <small>がくしゆう</small> を感ず
嘆息當時携手者	嘆息 <small>たふさ</small> 当時 <small>たうじ</small> 手 <small>たずさ</small> を携えし者
幾人相對說曾遊	幾人 <small>いくにん</small> 相對 <small>たい</small> して 曾遊 <small>そうゆう</small> を説かん

壑舟 壑は穴、穴の開いた舟、人の世は無常だと使っている。

曾遊 かつて遊んだ（詩を詠んだ）。

(この詩にはながい傍注がある)

充國 此に遊ぶこと 今を距へだてること二十年なりや 当時たうじ 唱和しょうわする者 篁たかむら 大道、大空上人、松井子璐、諸人今は皆あな在あらず 独ひとり河相

子蘭及び余存す。

(大意)

昔遊んだ林の丘や長い松、大きな石を見てみると、二十年以上経った今も変わらないことに感慨を覚える。だが、当時吟遊した友は、ほとんど亡くなってしまった。残った幾人かで、昔を懐かしく語り合おう。遍照寺を訪れた後、一行は続いて河相子蘭宅に向かう。

同充國訪子蘭

充國と 同に子蘭を訪う

黄葉夕陽村舎詩 前五一二

楚雲湘水二十年

楚雲 湘水 二十年

屈指同遊半九泉

指を屈すれば 同遊 半ばは 九泉

舊侶獨存君與我

旧侶 ひとり存す 君与我

尊前道故賀華顛

尊前 故きを道つて 華顛を賀す

楚雲湘水 楚の国にかかる雲や洞庭湖に流れこむ川、詩では、世渡りの苦勞を重ねる意味。九泉 あの世。侶 仲間。尊 樽。道 語ること。華顛 華は髪の白いこと、顛は頭。

(大意)

あれこれと世渡りして既に二十年。指を折り数えてみると、一緒に遊んだ仲間の半数が亡くなっている。昔の仲間は君と私が残っているだけだ、酒徳利を前にして、昔馴染みについて語り合った。白髪頭になるまで長生きができてめでたいものだ。

(H)文化七年(二八一〇)以前の作

『黄葉夕陽村舎詩』後編卷一と二は、前編から漏れたものを取り上げている。後編卷一と二から六首をあげる。

偶檢中箱得亡友藤井蘭水菅波子裕松井子璐高見新助書悽然賦此

偶 中箱を檢べ亡友藤井蘭水、菅波子裕、松井子璐、

高見新助が書を得て悽然として此を賦す

黄葉夕陽村舎詩 後一十七

黄公壚上幾追隨

黄公 壚上 幾たびか追隨す

忽見遺文感往時

忽ち遺文を見て往時を感ず

淡墨數行磨欲滅

淡墨 數行 磨て 滅せんと欲す

幽魂十載去何之

幽魂 十載 去つて何れにか之く

疎燈細雨論心夜

疎燈 細雨 心を論ずる夜

月底花陰鬪酒期

月底 花陰 酒を鬪むる期

獨倚晴軒舒且卷

獨り晴軒に倚つて 舒べ且つ巻く

流鶯聲裡夕陽移

流鶯 聲裡 夕陽移る

中箱 手文庫。悽然 いたましい、かなしい。壚 いろり。淡墨 うすい墨。十載 十年。磨滅 すりへる。幽魂 死者の魂。倚 よりかかる。舒 広げる。

(大意)

黄龍山遍照寺の上人を何度も一緒に訪ねて行ったものだ。手文庫の中にある故人が残した文を読み返すと、かつての事を思い出す。薄墨

で書かれた数行の文字は擦れて消えそうになっている。亡き友の魂は十年経った今、何処に行ってしまったのか。まばらな燈や霧雨が降る時も真理をめぐって議論した夜や月の灯りや花の下での友に酒を酌み交わした時もあった。独り晴れた軒下に座って亡友の文を広げて読み納める。木々の間を鳴きながら移る鶯の声と共に夕日が傾いていく。

*菅波子裕 菅波家の一族であると思わすが、詳細は不明。

*高見新助 福山の人。「高見屋」という商人と思われるが不明。

*藤井蘭水 神辺川南村庄屋藤井茂清の養子となる。茂清に男子が生まれたので別家する。茶山の私塾の支援者。詩「龍泉寺桜」にある「鬪酒人」が蘭水である。

龍泉寺櫻
寺有亡友蘭水墓
黄葉夕陽村舍詩
前二一九
老樹移來幾百春
年年麗艷占芳辰
林東在墓生苔鮮
曾是花前鬪酒人



藤井家墓域



龍泉寺本堂前の詩碑

同道光上人登黃龍山分得重字

道光上人ともと同一ともに黃龍山に登り、分わかちて重の字を得たり

黄葉夕陽村舍詩 後一十九

老禪方丈最高峯 老禪ろうぜんの方丈ほうじょう 最高峯

踏破中條紫翠濃 踏破たふす 中條しすいの紫翠こま 濃こままやかなり

湖海萍遊無路梗 湖海へいゆう 萍遊ふさ 路の梗ふさぐなく

乾坤樗散有人容 乾坤けんこん 樗散ちよさん 人の容いるる有り

松杉風外郊垌迴 松杉風外しょうしん 郊垌迴こうけいはるかに

簷簷香中洞壑重 簷簷香えんはく 中ちゆう 洞壑重どうかくなる

閑境剩知魂夢穩 閑境かんきやう 剩あまつさえ知る 魂夢穩こんむやかなるを

起來將及午齋鐘 起たつて來たれば 將じやうに午齋ごさいの鐘に及およぶんとす

老禪 大空上人を崇めた呼び方。方丈 ささやかな庵。踏破 踏み歩く。紫翠 山の形容で、青葉若葉のようす。湖海 ここでは世間。萍 浮草。梗 通るのを邪魔する、ふさぐ。乾坤 乾は西北、坤は西南で、ここでは世間。樗散 樗ちよ櫟れき散木さんぼくの略で 樗せんも 櫟くぬぎも使
い道のない木で転じて役に立たないこと。松杉風外 山の松や杉を吹き渡る風。郊垌迴 郊は町はずれ、垌は都から遠く離れた地。簷簷 簷はのき、簷は竹、ここでは軒下に植えてある竹。洞壑 洞はほら、壑はたに。齋 食事。

(大意)

大空上人の庵は最高峰にある。青葉若葉の翠の中を登ってきた。渡

る世間には無能で役に立たない人間を受け容れてくれる所もある。遙か町外れ山の松杉を風が吹き抜けている。軒の竹の香が谷に広がっている。お参りしたら、この時を待ち受けていたように、午鐘が鳴りだした。

* 道光上人（一七四六〜一八二九）

茶山が京都遊学時に会おう。出雲国平田の報恩寺住職となり、度々芸備を訪ねる。茶山を訪ねた際には、長逗留した人でもある。茶山と近隣を吟遊しており、遍照寺にも度々訪れている。

次韻大空上人感事作 大空上人の事に感じての作に次韻す

黄葉夕陽村舎詩 後二十一

人間毀譽鎮啾啾	じんかん 人間	の毀譽 鎮ま	つて啾啾	しゅうしゅう			
偶入閑聽亦作憂	たま	偶	たま	閑聽に入るも	亦た憂いを作す		
轉羨山中無曆日	うた	羨	うらや	む	山中	曆日無きを	
何曾皮裡有陽秋	か	つ	曾	皮裡	ひり	陽秋	有らんや

人間 世間、世の中。 毀譽 誇ることに、誉めること。 啾啾 低い声が長く尾を引いてほぞ細と続くこと。 山中無曆日 世間のあくせくした生活に関係ない。 皮裡 皮かぶりをして中身を隠していること。

陽秋 春秋。

(大意)

世の中の褒めたりくさしたりは鎮まったが、低い声は耳の底に細々と

長く続いている。その声がたまたま聞こえないようになれば、また、どう思っているのだろうと気になる。山の生活には曆は必要なく、世間のあくせくした生活に関係ない暮らしをしておられることが、いよいよ羨ましい。どうして皮かぶりをしているのに、ふたごころを隠すことができるうか。

登黄龍山

黄葉夕陽村舎詩 後二十二

彩翠模糊晚照春

さいすい
彩翠

もこ
模糊として

ばんしょう
晚照

うすづ
春

く

不知何處是黄龍

知らず
いづれの処か

是れ黄龍

狂詞直踏危巖上

きょうか
狂詞

きちに
危巖を踏みて上る

屐底驚濤萬壑松

げさてい
屐底の驚濤

まんがく
万壑の松

春 白で穀物をつく。 晚照 日没直後の陽光。 狂詞 戯れに吟ずる、冗談詩。 危巖 危なげに重なっている岩。 屐底 下駄の底。 驚濤 荒れ狂う波。 上から見ると荒れ狂う波のように見えるさま。 壑 谷。

(大意)

今しも樹々の緑が夕陽を受けて霞み、夕日が今にも入ろうか戻ろうかと戸惑って見えるよう見える。霞んでどこが黄龍山遍照寺なのかよく見えない。戯れに歌を口ずさんでいると大きな岩の上に立っている。奇岩の上に立って麓の方を見ると、足許に広がる松林が荒れ狂う波のよう広がっている。

山中示河篁諸子 黄葉夕陽村舎詩 後二一十三

山深藥草四時花 山深くして 藥草 四時花さく

路徑無人鳥語譁 路徑ろけい 人無く 鳥語かまびすし 譁

莫笑石頭眠至夜 笑う莫れ 石頭 眠つて夜に至るを

丹崖碧樹本吾家 丹崖たんがい 碧樹へきじゆ 本と吾が家

石頭 石のほとり。丹崖碧樹 赤いがけや緑色の樹。

(大意)

山が深くて藥草の花がいつでも咲いている。山道は人影もなく鳥の鳴き声だけがかしましい。石の傍に眠つて夜になろうとも君たちは笑つてくれるな。丹色の崖や緑の木々が茂る美しい深山こそ本来の吾が家だもの。

* 河 河相子蘭か君推であらう。 篁 篁大道であらう。

遍照寺 黄葉夕陽村舎詩 後二一十五

撫松拜石入雲霞 松を撫なで 石を拜して 雲霞うんかに入る

滿路清風紫棟花 滿路まんろの清風せいふう 紫棟しれんの花

香篆艾烟岑寂甚 香篆こうてん 艾烟がいえん 岑寂しんじやく 甚し

緑陰堆裡病僧家 緑陰りよくいん 堆裡たいり 病僧の家

棟 センダンの木 紫の小さな花をつける。艾烟 お灸のもぐさで、その煙。篆 印章に使う文字。岑寂 ひっそり物静かなこと。緑陰 緑の

陰が堆く映してだされている状況。(大意)

立派な枝ぶりの松、形のいい石などをみながら霞のかかったような遍照寺の参道を登る。センダンの木々が紫の花をつけた枝を一杯広げて、花の匂いを含んで清らかな風が吹いている。上人の枕元の香炉から、印章の形をしたお灸の烟がゆらゆらとたちのぼっており、緑の陰がふんだんにある部屋で養生されている。

* 句碑 遍照寺本堂前の「良夜の碑」

「月白風清如此良夜何」

(大意) 月白く風清し

此の良夜を如何せん



【ちよつと休憩】茶山も和歌を少なからず詠んでいたので紹介する。

天明八年 山田早苗

せきいるゝ山田の水のあさみとりなひく早苗の色もすゝしき

文化元年 江戸行詠草

中空にありとはきけときて見れば

さらに驚く富士のやたかさ

文化八年 菅 萬年(公壽)歿に当り

老いらくの我か跡をこそたのしみに

われにとわるゝ塚となりしか

〔菅茶山の詠歌〕 菅波寛編 葦陽文化研究会発行

菅茶山が往来した中條路

一 中條往還

茶山は河相君推・松風館だけでなく、遍照寺や吟友を頻繁に訪ねている。茶山が中條へ辿る道は、二通りの道があったと推定される。

① 丁屋道 ちようやみち

掛の橋（大仙坊橋）→豊久保→丁屋（山田川沿い）→山田谷

遍照寺など

② 箱田道

掛の橋（大仙坊橋）→秋丸→箱田（箱田川沿い）→山田谷

遍照寺など

中條への往復路で詠んだ詩は時期のはっきりしないものが多い。『黄葉夕陽村舎詩』や詩の内容などから推測して掲載する。



大仙坊橋 橋の左に廉塾
下流に「掛の橋」が見える



箱田川



中陣池から見た山田谷



箱田川畔に建つ地蔵堂



山田川と山田谷

二 往来途上で詠んだ詩

(一) 天明二年（一七八二）以前の作

『黄葉夕陽村舎詩』の前編巻一には天明二年までに詠まれた詩が掲載されている。この詩は比較的早い時期の作品であると思われる。

上寒水寺路上	寒水寺に上る路上	黄葉夕陽村舎詩 前一―九
寺見飛禽外	寺は見ゆ 飛禽の外	
泉鳴雜樹中	泉は鳴る 雜樹の中	
狂痴從世棄	狂痴 世の棄つるに從せ	
尊酒有人同	尊酒 人の同じうする有り	
尋徑追牛跡	徑を尋ねて牛跡を追	
班荊待午風	荊を班つて 午風を待つ	
雲松隨處在	雲松 隨處に在り	
吾道幾時窮	吾が道 幾時か窮らん	

狂痴 狂った痴れ者（茶山の自称）。尊酒 酒樽。從 まかす。

尊 酒の容器。徑 小道。

（大意）

寒水寺が鳥の飛んでいる空の向こうに見える。足下の谷川の水音が雜樹の繁みの中から聞こえる。世間が狂痴な自分を相手にしてくれないのに任せている。（ただ）酒の座だけには仲間に入れてもらえる。小徑に牛の足

跡を尋ねて上り、草を敷いて座り、午の風を待っている。到るところに雲のかかった松があり、自分の道はいつになっても行きつまることはないだろう。

【背景】

茶山は二十歳後半から三十歳代にかけて、災害や年貢取立の厳しさなどによる農村の疲弊状況に心を痛め、幕政や藩政に対して鋭い批判をしていた。それは「有鳥」「御領山大石の歌」「龍盤」「狂痴」など詠まれた詩からもわかる。この詩はこの時代に詠まれたと推測される。この詩でも「吾道幾時窮」と自分の無力さを嘆きながら、いつの日にか必ずや学種による世直しを決意を表明している。

* 寒水寺について (参考 福山市神辺歴史民俗資料館ホームページ)

寒水寺は山号を明尾山と称する真言宗大覚寺派の寺院である。訪ねるには堂々川沿いの道を登っていくと、その入口に「寒水寺」と記した石碑が建っている。その立地はまさしく修業の場としての寺院であったことがわかる。旧参道には地藏二体を半浮彫りにした巨岩があり、さらに登ると仰ぎ見るように地藏が彫られ、霊地に入る導きのようで、山岳寺院として四隣を圧していたことがうかがえる。

「西中條村誌」によると「七堂伽藍（がらん）を配し、十二子院があった」とされる。



寒水寺本堂

○「上寒水寺路上」の後に次の詩が掲載されている。寒水寺への途中か、遍照寺への途中かは不明だが、「三年困世營」とあり気になる詩である。

松間	黄葉夕陽村舎詩 前一—十
松間値樵夫	松間 樵夫に値うて
閑話坐班荆	閑話 坐して 荆を班つ
縹紗中條色	縹 紗 たり 中條の色
蒼茫太古情	蒼茫たり 太古の情
午鐘知遠寺	午鐘 遠寺を知る
霽樹辨遙城	霽樹 遙城を弁ず
愧昔為亭吏	愧ず 昔 亭吏と為つて
三年困世營	三年 世營に 困しを

値 遇う。 樵夫 木こり。 班 敷く。 縹紗 ひるがえるさま。 中條 山 中国山東省に名山中條山があり。 蒼茫 広々としたさま。 霽 は れわたるさま。 亭吏 宿場の長(当時本荘屋が本陣でもあった)。

(大意)

松林を登る途中で木こりに出会って、草を敷いて座り暫く世間話をした。中條の山々はほんのりして、果てしなく広がり何となく太古の世界に後戻りしたように思われる。午を告げる鐘の音で遠くにお寺があることがわかる。晴れた樹々の間からはるかに福山のお城がそれとなくわかる。私が宿場役人となって三年間世俗を相手にあくせくしたことを恥ずかしく思い出す。

* 本荘屋の養子であった期間は一年ばかりであったが、詩的表現で

あろうか三年としている。この事はあまり知られていない。

〔背景〕

茶山の本家である本荘屋菅波家では、当主好股の子は娘二人で男子がおらず跡継ぎ問題があった。明和二年（二七六五）好股が死去する。そこで本荘屋菅波家後継者に白羽の矢が立ったのが茶山である。

『菅波信道一代記』（前編巻之八）に「分家之太中ヲ養子ニシテ妻ス。」とある。茶山に

は五歳下に弟汝梗があり、本家本荘屋の跡継ぎにと望まれたのである。

茶山はあね姉娘と結婚し本荘屋の養子となり、名前を「百助」から「久次郎」に改めている。

『文恭先生年譜略』にも「（茶山）年十八にして其の家を継ぎ、通称久治郎（久次郎）と改め里正となり、居る事一年許にして里正職を厭い文字を嗜み（後略）一年余りで離縁」とある。

本家本荘屋は川北村の里正（庄屋）で、村の代表であり行政機構の末端である。日常のもめごとから、藩からの命令文書の伝達など多岐にわたっていたことが推測され、茶山は、その繁多な日常に困惑し、里正の職務より、学問に専念したいと願っていたのであろう。

どのような経過かは不明だが、約一年余に離縁となる。茶山の後継には、手城村神尾平左衛門の子亮方が迎えられ本荘屋五代目となっている。茶山は本荘屋を継いで苦労したことを思い返して詩にしている。



東本陣跡 台所門
『神辺宿の今昔』（神辺宿文化研究会）より

○ また、次の詩を詠んでいる。

九日与諸子上寒水山 集外 菅茶山遺稿
 酔避斜暉下畫巒 酔を避け 斜暉 畫巒を下る
 茶鐘支石坐臨湍 茶鐘は石をして支え 臨湍に坐す
 回頭世上皆塵土 頭をめぐらせば 世上 皆な塵土
 如此重陽得亦難 此くの如く 重陽 亦難を得ん

暉 ひかり、輝き。巒 峰、山並み。茶鐘 茶をわかす足のある釜。
湍 早瀬。塵土 けがれた世。重陽 九月九日、菊の節句で登高と称して山に登っていた。難 なやみ

（大意）

酔いを醒まして夕方になって絵に画いたような山並みを下る。茶をわかす釜がうまく置かれず、石で支え早瀬の側に座る。私の周りを見てみると、正義がおろそかにされ、世間は皆けがれているように思う。重陽の節句を祝ったばかりなのに、また悩みを抱え込んでしまった。



寒水寺の旧参道

（二） 天明四年（一七八四）の作

雪日還自中條

黄葉夕陽村舎詩 前二一七

春雪如篩野無風
飛絮舞入輿簾中
同雲模糊去鳥没
近山隱見遠山空
僕夫忍凍數顰眉
余亦擁褐縮頭龜
苦境由來人爭避
誰知此中樂自隨
將策試深欲盈尺
乾坤俄爲無瑕璧
吉凶糾繩歲流波
營謀何如時賞適
歸來温酒看瓶梅
輿中苦樂兩陳迹

春雪 篩ふるうが如く 野 風無し
飛絮 舞ひじようて入る 輿よれん簾の中
同雲 模糊もことして 去 鳥没きよちようし
近山 隱見いんけんして 遠山 空むなし
僕夫 凍を忍び 数々 眉を顰ひそめ
余 亦た 褐を擁して 頭を縮むる龜
苦境 由來 人争うて避く
誰か 知らん 此の中に 樂しみ 自ら 随したがうを
策を將さくつて 深さを 試こころむれば 尺に 盈みちんと 欲す
乾坤 俄けんこんかに 無瑕むかの 璧へきと 爲る
吉凶 繩を 糾あざのうて 歲 波を流し
營謀 何ぞ 時に 賞適するに 如かんや
歸り 來たつて 酒を 温めて 瓶梅へいばいを 看れば
輿中 苦樂 兩つながら 陳迹ちんせき

篩 ふるい。絮 わた。輿簾 すだれのついた輿。同雲 雪雲か。僕夫 かごかき。褐 ぬのこ、綿入れ。策 むち。無瑕璧 傷のない玉、万物 雪の覆われて一様に美しくなること。吉凶糾繩 吉凶が別物ではなく一本の縄のように入り混じる。營謀 人生のいとなみ。時賞適 その時々を賞して満足する。陳迹 古い迹（あと）の意で過ぎ去った夢。

(大意)

雪が篩でおろすように風もない野に降りしきり、綿毛のように飛んで輿の簾の間から入ってくる。雪雲が臙にたちこめて飛ぶ鳥も見えなくなり、近くの山々も見え隠れして、遠くの山は見えない。僕夫はしばしば寒さをこらえて顔をしかめ、自分もまた綿入れをかぶって龜の如く頭を引つ込める。元來人間は苦境を争うて避けたがるが、むしろ苦境を凌ぐことの中にこそ楽しみがあることをだれ一人知る者はいない。杖をもつて深さをはかるともう一尺以上積もった。あたり一面雪にすっぽり包まれて等しく傷のない玉のごとく美しくなった。人の吉凶はあざなえる繩の如く年月が流れていくものだ。計画も実践も苦樂に一喜一憂することなく、その時々を賞適するに越したことはない。家に帰りつくと早速酒を温めて、瓶に挿した梅の花を見ていると、今しがた通ってきた雪道の苦と樂がまるで夢のようだ。

(三) 天明六年（一七八六）の作

長く続いた賄賂政治の元凶と言われた田沼意次が失脚し、松平定信が老中となる。茶山は世の中が変わると大いに期待した時期で詩にもその期待感が見える。

丁屋路上

黄葉夕陽村舎詩 前三一十三

柳塙梅墩入午晴
江郷臘月已春生
風收木末鳥將語
暖到跛心氷有聲

柳塙 梅墩 午晴 に入り
江郷 臘月 已に春生ず
風收 木末 鳥將に語らんとし
暖は跛心に到りて 氷に声あり

仍見諸曹除舊弊 仍ほ見る 諸曹の旧弊を除するを
 近傳三府擢時英 近ごろ伝ふ 三府 時英を擢くと
 去年今日山陽道 去年の今日 山陽道
 群盜如毛白晝行 群盜の如く 白晝に行きしを

塙 どもて。 墩 小高い丘。臘月 陰曆十二月。陂 どもて。諸曹 それ

ぞれの役所。曹 つかさ。去年今日 一年前。

(大意)

柳の土手も梅の咲く丘も 水辺の村里では十二月に早や春の兆しがかがえる。寒風も収まり木々では鶯のさえずる声がある。暖気が堤防の中央まで届くと、氷がゆるんで溶ける音がする。そのうえ役所の各部署ではかつての弊害が除かれたとのこと。近頃、江戸などの中央では英俊の誉れ高い人物を抜擢したということだ。一年前には田沼意次が老中にあり、街道筋には盗賊が白昼群れをなしていたのに、盗人たちは獣のごとく何処かに消え聞かなくなってしまった。

*丁屋 西中条深水地区の入り口で中陣池北側付近。

この池の東側には深水地区があり、谷を隔てて山田谷がある。

「丁屋」という小字は正確には読んでもらえず、「よろろや」としている書物もある。



中陣池と丁屋地区

所見 黄葉夕陽村舎詩 前三一四

落日残紅在 落日 残紅在り
 新秧嫩翠重 新秧 嫩翠 重なる
 遥雷何處雨 遥雷 何れの処の雨ぞ
 雲没兩三峰 雲は没する 兩三峰

秧苗。嫩若くてしなやか。翠 みどり。重 野山の緑に囲まれた田圃にさらに若苗の緑を添える。遥雷 遠くでなる雷。

(大意)

夕日が西の空を赤く染めている。野山の緑に囲まれた田圃の若苗の緑が目にしみる。遠雷の底鳴りはどこに雨を降らしているのだろうか。あつという間に雲がひろがって二つ三つ峰を隠してしまった。

〔背景〕この詩は十勝碑林の中に詩碑として建立されている。

作詩年は、「丙午」とあるので、天明六年であることがわかる。この時期は候不順で不作が続き農民の暮らしはひっ迫していた。茶山は田植えが終わり、若苗を西日が照らしている様を見て、今年の豊作を願って詠んだのであろう。



詩碑「所見」

(四) 寛政五(癸丑)年(一七九三)の作

即事

黄葉夕陽村舎詩 前四―三

晨氣 寒林霧

晨氣 林霧を裹かかけて

晴光 満野堂

晴光 野堂やどうに満みつ

雀鳴 何啻なにか

雀鳴 何ぞ啻さくさく啻さくたる

早稲 已登場

早稲 已じょうに場じょうに登のぼる

晨氣 明け方の大気。寒 からげる、着物の裾を端折ること。啻 鳴く、叫ぶ。早稲 早稲の稲。場に登るゝお眼にかからせてもらう。

(大意)

靄のかかった明け方のぼんやりとしていた林が、まるで裾から端折っていくかのように霧が消えていき、はっきり見えるようになった。やがて、日の光が野堂をいっぱい照らした。雀や野鳥が何と矢継ぎ早に鳴くことだろう。田んぼには早稲の稲が早くも穂を出している。

寛政四年(一七九二) 茶山は福山藩より五人扶持を給せられる。

藩主阿部正倫公が林大学守と詩について語った時、当世第一の詩人として茶山の名前を挙げた。阿部侯は早速家来に命じて茶山の学問や人物について詳しいことを問わせ、やがて五人扶持を給した。このことは頼山陽の「茶山先生行状」に記してある。

(五) 寛政十一年(一七九九)の作

中條歸路次文輔韻

黄葉夕陽村舎詩 前五―七

郊雲 釀雨夜山低

郊雲 雨を釀かもして 夜山やさん低ひし

家指 長松亂竹西

家は指す 長松 乱竹らんちくの西

十里野程 人不見

十里の野程 人見えず

秧雞 角角隔林啼

秧おうけい雞かかくかく角角 林を隔へだてて啼なく

長松 背の高い松。乱竹 竹が入り乱れて茂っている様。秧雞 クイ

ナ。角角 叩くように鳴く。*文輔については不明

(大意)

村の山に雲が立ち込めていて、今にも雨が降り出しそうだ。夜の山の稜線がどんよりとした天気ではんやりと見える。目指す自分の家は、十里(遠い)の野の道には人気もない。クイナがカクカクと林の向こうで鳴いている。

○ 詠まれた時期は不明だが、文化七年(一八一〇)以前に詠まれた詩

次韻小河貞藏中條途中作 黄葉夕陽村舎詩 後二―五

雨鳴 簑袂急陰風

雨は簑袂さへいに鳴り 陰風 急なり

拂面 烟霏洗酒紅

面かおを払い 烟霏えんぴ 酒紅を洗うう

欲向前村 暫相避

前村に向い 暫しばらく 相避あいさけんと欲す

人家 已在夕陽中

人家は已に 夕陽せきようの中に在り

簑袂 蓑と袖。陰風 北風、陰気で殺伐な風。 烟霏 煙と霏、霏がた
なびく。

(大意)

簑を濡らし袂を流れるほどの雨と北風がビュービュー吹き荒れる。霏が
たなびき酒で赤くなった顔を撫でていく。たまりかねて、風雨を避けよう
と前方に見える近くの村にむけて急ぐ。人家が近くなったら風雨もやみ夕
日が差してきた。

* 小河貞藏 備中国倉敷の人。幼児期神辺に住む。

(六) 文化七年(二八一〇)の作

十七夜雨還自中條	十七夜	雨	中條自り還る
雨跳簑袂氣陰森	雨は簑袂に跳て	氣陰森たり	
四野空濛夜已深	四野 空濛として	夜已深し	
仰看片雲頭上白	仰ぎ見る 片雲	頭上に白く	
知佗明月到天心	知んぬ佗の明月の	天心に到るを	

黄葉夕陽村舎詩 後二十一
後二一十一

陰森 薄暗くて物寂しい。濛 小雨や霧雨。

知んぬ「はああ、わかった」という意。佗 他と同じ。天心 天の真上。

(大意)

降る雨が着ている蓑の袂に飛び散って、あたりは暗くて物寂しい。四方
どちらを向いても霧雨で何も見えない。しかも夜はかなり更けた時分だ。

見上げると空には一塊の雲が見え、月のあるところが白く見える。そうか、
明月が天の真上に登ってきているのだな。

* 此の夜は小雨が降り、月が見えなかったのだろう。しかし、雲の向こ
うにぼんやりと浮かぶ月を覗いて詠んだのでしよう。このようにいつも帰
るのは夜も更けた時刻であったのだろう。

(七) 文化九年(二八二二)から十年(二八二三)にかけての作

久留詞客臥田家	久しく詞客を留めて田家に臥す
偶值晴和命鹿車	偶たま晴和に値うて 鹿車を命ず
潤涸白沙全解凍	潤は涸れて 白沙全く凍を解き
野喧黄菜誤生花	野 喧にして 黄菜誤って 花を生ず
村聲有趣聽逾好	村声 趣有り 聴きて 逾好し
山路無程興也加	山路 程無し 興也た加わる
但恐荒涼使君厭	但だ恐れる 荒涼 君をして厭わしむるを
都人平日慣豪華	都人は 平日 豪華に慣る

與佐藤子文同往中條路上口號
佐藤子文と同一に往く中條路上口号
黄葉夕陽村舎詩 後四一二十三

詞客 詩歌を作る人、文人。田家 百姓家、田舎の家。晴和 天氣が晴れ
て氣候が和んだ。鹿車 鹿の引く車、ここでは駕籠。潤 谷川。沙 砂。
(大意)

暫く文人（子文）を田舎の家に泊めて寝起きしてもらった。偶々、晴れて外気も和らいだ。水が涸れ白沙の谷川の氷が溶けた。野原では菜の花が時知らず咲き出した。村人の会話は品が有り、聴いていて好感が持てる。山路に差し掛かると一段と興味が湧き、果てしなく続いて行くように思える。ただ、あなたが厭きてしまうのではないかと。都会に住むあなたは平素贅沢な暮らしに慣れていらっしやるから。

* 佐藤子文 伊勢神宮の御師、神官としての身分は低いが、学識の高
いグループ層。毎年、歳の暮れには新年の暦やお祓い札を配るため廉塾
にもやって来て長逗留していたらしい。北條霞亭（伊勢出身）と親し
く、霞亭の廉塾招聘、茶山姪敬との婚姻に助力している。

圓通寺同諸子賦

黄葉夕陽村舎詩 後四―十四

春風三月古禪房 春風 三月 古禪房
房後房前花木香 房後 房前 花木香かんば
毎得一詩随手寫 一詩を得る毎に 手に随したがつて写す
吟箋無字不韶光 吟箋 字として 韶光しょうこうならざるは無し

箋 詩文や手紙を書くのに用いる美しい紙。韶光 春の美しい景色。

（大意）

春三月 由緒ある古寺に温かな春の風が吹いている。周りの花木からかぐわしい香りが漂ってくる。詩が一つできると書き留める。詩箋の上には春の美しい光が当たっている。

* この圓通寺で詠んだ詩が、玉島にある良寛上人の修行した圓通寺とする書物がある。しかし、茶山日記や詠まれた情景からして、この圓通寺は東中条の圓通寺であることがわかる。

上廣山寺途中作 集外菅茶山遺稿

甘雨荒村路	甘雨 荒村の路
佳招多寺期	佳招 <small>かしょう</small> 多寺に期するを
病軀常懶歩	病軀 <small>びょうく</small> 常に 懶出 <small>らいしゅつ</small> するを
幽事頓忘疲	幽事 頓 <small>とみ</small> に 疲を忘る
石腹青將滴	石腹青く 將 <small>した</small> に滴たらんとす
峯皴翠更滋	峯皴 <small>ほうしゅう</small> の翠 更に滋し
澗沙泥不滑	澗沙 <small>かんしゃ</small> の泥 滑らず
傘屐好追隨	傘屐 <small>さんげき</small> 追隨を好とす

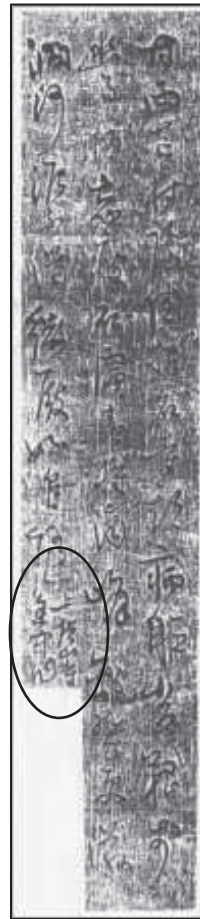
甘雨 ほどよい時に降る雨。期 約束して会う。艱 むずかしい、苦しむ。幽事 奥深くても静かなさま。峰皴 山が重なったさま、山並み。屐 はきもの、下駄。

（大意）

恵の雨が降るひなびた村の路を登る。名のあるお寺から鄭重なお招きがあった。病がちで日頃歩くにも難儀をしているのに、詩会が楽しみで道すがらのしじまに疲れを忘れてしまうほどだ。岩肌に張りついた青苔から

霏が滴り落ちており、山並みの翠は一層濃さを増している。谷川に沿った小径は、滑る心配もない。傘を差し下駄を履いて案内の者についていくのもいいものだ。

この書が次の写真である。文末に「上廣山寺途中作」とある。



この作品は所在不明なのが悔やまれる。しかし、日記とも適合しているので、茶山が廣山寺への途中で詠んだ詩であるとしてもいいだろう。なお、遺稿集では詩題が「中條山中 赴黄龍寺詩会」とある。

* 圓通寺・廣山寺とも真言宗の寺院である。東中条から三谷に越す峠の手前の中腹に並んで建っている。

どちらのお寺の山号も「玄洞山」と称している。



廣山寺本堂



圓通寺全景



県道から見た二つの寺院

廣山寺について、福山市神辺民俗資料館のホームページに次のように紹介されている。

標高一二五mの山腹に位置し、唐に渡った弘法大師・空海が帰国後に建立したと伝えられ、その時、白檀（インドネシア原産の常緑高木）の木を刻み、本尊である地藏菩薩を作り安置したとされています。

その後、盛衰を経て正応元（一二八八）年に讃岐国「普通寺」の僧侶・宥鏝ゆうばんが中興したとされ、この時宥鏝は、弘法大師の霊跡を慕い尾道「西国寺」府中「栄明寺」上下「法身院」を同時期に再興し、「廣山寺」とあわせて「備後四院」と称されました。

「水野記」によれば、「古来、讃州善通寺の僧・宥鏝の建立の地なり。古くは十二寺、寺領百五十貫あったが、天文年間（一五三二～一五五五年）に衰微して三寺となり、永祿六（一五六三）年に毛利氏から十五貫を寄進されるが、福島氏により没収された。」と記されています。

また、文明三（一四七一）年の古記録には「二ヶ寺七坊の末寺または塔頭たつちゆう（同一山内にある小寺院。大寺に所属する別坊）を有していた」ことが記されているそうです。

近年の開発で、周辺から鎌倉末期～南北朝時代頃のものと思われる多数の五輪塔を出土しています。昔は真言宗でも大覚寺派でしたが、現在は高野山に改派しています。

箱田道中

黄葉夕陽村舎詩 遺三一四

經此山蹊歲幾回
 此の山蹊さんけいをふ経ること 歳に幾回いくかい

毎將夜半始還來
 毎つねに夜半よるならんとして 始めてかえり還來かえり

行思往事停籃らん筭
 行く行くらんよ思とどう 往事とど 籃らんよ筭とどを停とどめしを

數點流螢水竹限
 數すうてん點るけいの流すい螢ちく 水竹くまの限

蹊道。 籃筭 かご。 流螢 飛びゆく螢火。
 限 水が岸に曲がり入っている所。

(大意)

この山合いの道を年に幾度往来することか。いつも夜半近くになってから家に帰ってくる。以前はよくここで駕籠を留めて星の降るような螢火をめでものだ。つくづく回想していると、水辺の竹藪の中から数匹の螢が出て飛んで行った。



詩碑 箱田道中

【ちよつと休憩】

詩碑「箱田道中」の隣に石碑「箱田良助誕生の地」が建っている。良助は寛政二年（一七九〇）箱田村庄屋細川園右衛門の次男として生まれた。文化四年（一八〇七）江戸に出て伊能忠敬に入門。測量術を学ぶ。九州測量に参加した後、忠敬の筆頭内弟子として測量及び地図製作に尽力し、大日本沿海輿地全図完成に大きく寄与した。幕府艦隊を率いて函館五稜郭に立てこもった榎本武揚は良助の次男である。

茶山ポエムと茶山ポエム絵画

茶山の漢詩を子ども達にもわかりやすく翻訳した現代詩が「茶山ポエム」です。「ポエム絵画」とは、茶山ポエムを読んで浮かんだイメージを画いた絵画です。

茶山ポエム「夕日」

夕日沈んだ 空まだ赤い
 たんぼの若苗萌え重なつて
 遠くで 雷どこかで雨か
 山のとつぺん 雲の中

中山善照作



茶山ポエム絵画 「夕日」

原詩・・・42頁参照

所見

落日残紅在	落日 残紅 <small>ざんこうあ</small> 在り
新秧嫩翠重	新秧 嫩翠 <small>しんおう どんすい</small> 重なる
遥雷何處雨	遥雷 何れの処の雨ぞ <small>ようらい</small>
雲没兩三峰	雲は没する 兩三峰 <small>さんほう</small>

【仮説】松風館十勝は邸内及び山田谷一帯に設置された

松風館十勝はどのように配置されていたかについては不明である。

昭和十五年（一九四〇）猪原薫一氏が「深安郡中條村舊蹟探訪記」「松風館十勝」を『備後史談十六巻七号・第十号』で発表された。その中で

- 松風館は林泉をめぐらし、池亭を設け且邸内の十勝を定めていた。
- 池が邸の南西隅に在ったことを知り得た。而て松風館十勝は多く此の池邊に在ったらしい」としている。

平成十八年（二〇〇六）武田武美氏（山田地区在住、菅茶山顕彰会元理事、郷土史家）は、「松風館十勝碑林除幕式」の資料の中で、次のように研究成果を発表されていた。

「松風館十勝は屋敷内の池亭だけに設けられたものではなく、邸内と山田谷一帯の風雅な地に標識を設置したのではないか」。

理由として、河相家は庄屋職を務めながら酒造業を営んでいたことを考えると酒造場、米蔵、薪小屋、米つき場などの付属施設が必要なことから、客殿たる松風館に隣接する場所に大きな庭を配し、その中に十勝もの標識を建てるには狭すぎる土地である。

また、『西中條村史』に「邸内假山ノ内十勝石碑アリシ」とあることから武田武美氏の遺稿を基に、菅茶山や松風館を訪れた文人たちの詩歌、文献や古老からの聞き取りを行い検証を試みた。

一 詩や文献より推察する

(一) 詩

- ① 「松風館即事」『黄葉夕陽村舎詩』 後一―二十一
- 養魚場 ○ 鹿の飼育 ○ 玄関先まで乗り付ける

② 「河相保之松風館同菅禮卿賦」 頼春水の詩

○ 澗から引き込んだ泉水が流れる ○ 柑橘系の樹

③ 「松風館即事」 『黄葉夕陽村舎詩』 前三―十五

○ 松や樟の木々 ○ 竹林

④ 「中秋飲河相君推宅」 『黄葉夕陽村舎詩』 前二―十八

○ 月見の宴

⑤ 「河相君推宅即事」 西山拙斎の詩

○ 松の姿が池に浮かぶ ○ 苔がはえる庭

⑥ 「松風館」 『黄葉夕陽村舎詩』 前四―二十四

○ 穀物倉庫が隣接 ○ 池亭

(二) 衝立から

○ 「松風館」「棣棠橋」「鳥語澗」「鳴玉橋」の方位を示す四角柱が建てられていた

○ 「迎碧墩」は「鳥語澗の北岸に刻立す」とある

(三) 文献『西中條村史』

○ 「邸内假山ノ内十勝石碑アリシ」としている。

二 地籍図（明治初期）と現地調査、古老からの聞き取りで推察する

○ 象山献燈の東側に邸内を通る道があり、奥の方に良質な水が出る井戸と大量の炭などが出土した場所があり、酒造場と推察される。

○ 昭和十五年に所有地上部の畑が灌漑対策用池となり新池（山田新池）と呼ばれるようになる。（河相家墓地の横）

○ 谷奥には大小三つの池があったが、すべて埋められて現在は運動広場となっている。

○ 山田谷に通じる道沿いに「でえやしき」（備後なまり土居屋敷）と呼ばれる大きな屋敷跡があった。

三 十勝の位置を推定する

(一) 酒造場と案内標識「四勝標柱」

象山献燈東側の通路は明治初期の地籍図にもあり、君推の時代から存在していたと考えた。武田武美氏は「その道を進んだ奥に井戸があり、大量の炭も発見されたのでその付近を酒造場」と推定している。

衝立にある永富充国の書（棟棠橋・鳥語潤・松風館・鳴玉橋）からするとこの酒造場付近に「四勝標柱」が建てられていたと推定されている。「以て其方なるを知る也」とするに一番都合のいい場所であると。

(二) 松風館十勝を推定する

① 「松風館」は象山献燈の奥側（北側）に建つ。

古老の話では「跡地の南西隅に池が存在していたと聞いた」（『備後史談十六巻七号』）とあり、跡地の南西部に池を配置した庭園や東屋があり、その周囲に松や樟、竹林をはじめ柑橘系の花木も植えられていたと推定する。



「松風館」象山献燈の北側に

③ 「棟棠橋」は「四勝標柱」から西方か北西方向にあったと考えられる。

松浦正明氏は『菅茶山顕彰会会報十六号』で、「棟」はニワウメ、「棠」はヤマナシとさされているが、「棟棠」は「山吹の漢名」とある。（『新潮日本語漢字辞典・新潮社』）また、菅波堅次氏も『神辺風土記（一）』の中で「山吹」としている。

その場所は案内標識「四勝標柱」からすると、西方にあったと考えられる。



「棟棠橋」（推定）

武田武美氏は、「河相家墓地旧入口（土居屋敷の北側）には谷の奥から小川が流れており、その付近には六十年前まで、山吹が綺麗な花を咲かせていた」と話し場所を推定していた。

『松風館記』には天野雅が「この地で曲水の宴でもてなされた」と記している。（『備後史談』十七巻三号）

この小川は上流のため池付近を源として、神社「大明神」、垂白棚の傍を流れ、「棟棠橋」に至る。河相君推は天野雅を橋の袂に誘い、筵を敷いて宴席にしたのであろう。現在は場所も荒れはてている。

③ 「垂白棚」は枝垂れ藤が咲き誇る場所で「棟棠橋」の奥にあった。

河相家墓地旧入口（今は消滅）を過ぎ「大明神社」がある手前付近であろう。現在は荒れ果てた小径となり周辺一帯は耕作放棄地となっているが、戦後しばらくは藤の花が一面にきれいな花を咲かせており、武田武美氏はこの場所を「垂白棚」と推定している。

④ 「紅於徑」は「棟棠橋」を過ぎ山田谷の奥へたどる山徑にあった。

昔は山道の両側に楓の木々が茂り、秋には見事な紅葉であったという。この辺りに「紅於徑」の石碑が建てられたと推定される。

⑤ 「浸翠池」は地域の運動広場となる。

ここが山田谷の最深部でかつては大小三つの池があり、一番大きい池の奥側には松の大本が枝を伸ばし、その影が湖面に映っていた。

この池には「ぬなは（じゅんさい）が生えていた。」また、「一番小さい池はなぜか蒼い水を湛えていた」と武田武美氏は記している。

⑥ 「迎碧墩」は山田谷の一番高い場所にあったと推定される。



「紅於徑」（推定）



「垂白棚」（推定）

武田武美氏は「松風館敷地の南東隅か南西隅にあった」としている。しかし、衝立の菅茶山の記文に「立於鳥語澗北岸」とあるので再検討した。「鳥語澗の北岸」ならば武田武美の推定には無理がある。

「碧」は「澄んだ空の色」「木々の青々とした色」「墩」は小高い丘とある。(『新潮日本語漢字辞典』)

小高い丘で遠く神辺平野を一望できる場所、木々の緑に囲まれた所とすると山田谷の一番高い場所、現在の新池になっている北岸付近であれば、茶山の記文とも一致する。新池は畑を掘り下げて造った池であり、ここからの眺望は「迎碧墩」の名にふさわしいと考える。

石碑「迎碧墩」は新池造成時に「象山献燈」付近に移設され、さらに現在地(西中条親戚宅)に移されたのではないかと。

⑦「鳴玉橋」「鳥語澗」は松風館敷地東側に流れる山田川畔にあった。

案内標識「四勝標柱」からすると、「鳴玉橋」は南東方向に架かった橋と推定される。松風館跡地の東側には山田川が流れる。松風館跡地の南東部あたりの山田川にかかる橋であったろう。「鳥語澗」は案内標識「四勝標柱」では北東を指している。武田武美氏は現在の「新池」東側ではないかと推定されている。新池の東側は、雑木の山林が迫り、鶯やメジロなどの多くの鳥たちがさえずっていたことであろう。

⑧「魚楽梁」は山田川に架かる「鳴玉橋」の少し上流部と考えられる。

山田川の傾斜は大きく、数カ所段差がある場所(通称ドンドン)がある。その落差を利用して養魚場としていたのではないかと思われる。武田武美氏は四、五十年前までこの場所で竹の簀の子を張って、鯉を



迎碧墩 (新池の奥と推定)



鳴玉橋 (推定)



鳥語澗 (推定)

養殖していた人がいたと書き留めている。その「ドンドン」下流部に竹の簀の子を設置して鯉や鮒を飼い、来客をもてなしていたのだろうか。

⑨「娯論亭」の位置ははっきりしない。

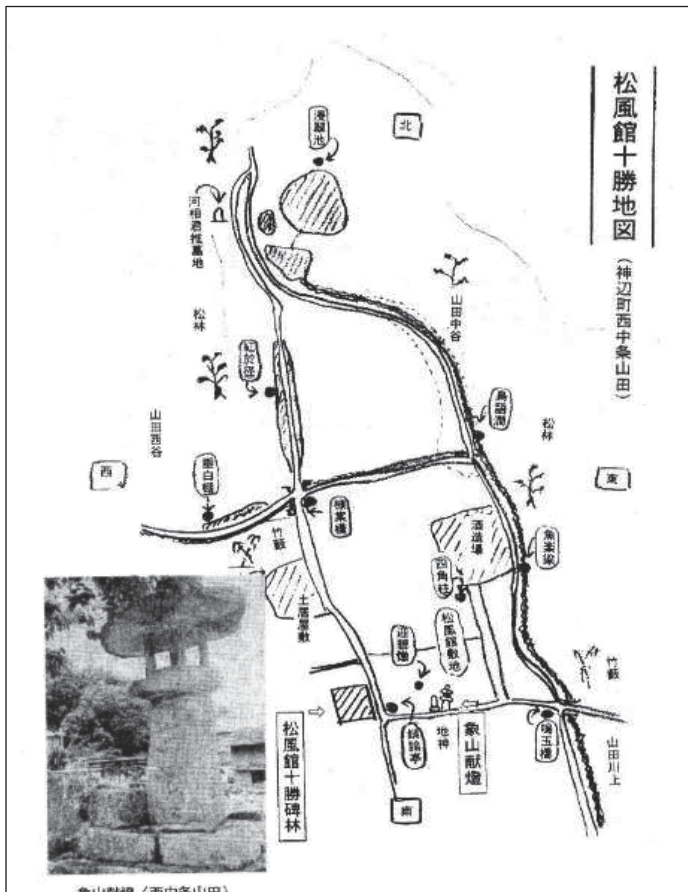
松風館に隣接した西南の場所に池を配置した庭園内に東屋を建て「娯論亭」としていたと武田武美氏は推定している。

四「松風館十勝推定地図」を描いてみる

武田武美氏の遺稿を基に検討し推定した。しかし、資料が少なく確定するに至っていない。また、茶山和歌「寛政四年松風館庭鳴玉橋」や茶山日記「享和三年三月二十五日 君推來謝致四勝題字」の解明に至っていない。今後の取り組み課題としたい。



魚楽梁 (推定)



武田武美氏発表の松風館十勝地図



記録「松風館十勝碑建立」

一 松風館十勝碑林除幕式典

この記録編は、碑林建立と保全に関する事実を収録して、後世に残すために編集した。

平成十八年(二〇〇六)二月二日立春 菅茶山生誕日、谷風は冷たいが冬晴れの日、深安郡神辺町西中条山田谷にある松風館跡の一角において、碑林完成祝賀行事が行われた。

福山市との合併を三月一日に控えたあわただしの中、多くの来賓の方々が出席、主催の菅茶山顕彰会は役員総出で対応した。

除幕式は次第に則り、司会・進行は武村理事、神事は中條八幡神社守屋宮司により執り進めた。

神事に先立ち高橋会長と岩川・井上副会長が君推と茶山ゆかりの象山献燈に点灯した。

十六ある石碑は出席者が分担して除幕し、続いて碑文と詩碑の朗読があり、来賓藤井登美子氏が自作の詩を朗読。終りに、玉串奉奠のあと「茶山先生賛歌」を斉唱した。

式典次第

- 一 開式の辞
- 二 「象山献燈」へ献燈
- 三 神事
- 四 各建立碑の除幕

- 石碑「松風館十勝」
- 石碑「松風館跡」

○松風館十勝名石碑

- ・ 垂白棚
- ・ 浸翠池
- ・ 魚楽梁
- ・ 娛論亭
- ・ 迎碧墩
- ・ 紅於徑
- ・ 松風館
- ・ 棗棠橋
- ・ 鳥語澗
- ・ 鳴玉橋

○詩碑

- ・ 詩碑「所見(落日殘紅)」
- ・ 詩碑「松風館即事」
- ・ 詩碑「河相保之松風館同菅禮卿賦」

○詩碑建立協力者石碑

五 碑文と詩碑の朗読

- 碑文「河相君推と松風館」
- 詩「所見(落日殘紅)」菅茶山
- 詩「松風館即事」菅茶山
- 詩「河相保之松風館同菅禮卿賦」頼春水
- 六 自作詩朗読 藤井登美子氏
- 七 玉串奉奠
- 八 斉唱「茶山先生賛歌」
- 九 閉会の辞

続いての行事

- 一 河相家墓域へ墓参
- 二 祝賀会 於 山田公民館



神事 中條八幡神社宮司



象山献燈へ献燈



除幕 石碑「松風館跡」



除幕 石碑「十勝碑林」



除幕 石碑「紅於徑」「垂白棚」



除幕 石碑「浸翠池」



除幕 石碑「棗棠橋」



除幕 詩碑「河相保之松風館同菅禮卿賦」



除幕 詩碑「所見」



除幕 詩碑「松風館即事」



詩碑朗読 詩「所見」

二 松風館十勝碑林祝賀会

平成十八年(二〇〇六)二月二日 除幕式と河相家墓域へ墓参の後、山田公民館で祝賀会が開催された。

冒頭、主催者を代表して菅茶山顕彰会会長高橋孝一氏より挨拶があり、続いて来賓の挨拶があった。

(一) 高橋孝一会長挨拶 (要旨)

・明日は節分という覚えやすい日に除幕式をすることが出来ました。
・私は二十年ほど前に、この山田谷の菅茶山揮毫の常夜灯「象山献燈」を見ました。側面には「文化丙子年孟春」とあり、約二百年前の正月頃に建立されたものです。裏面には文字が記されていますが、風化して何が書いてあるのか判りませんでした。諸氏の助けで拓本を採ったり文献を調べたりして、やっと読むことができました。いまでも覚えています。

やはらぐる 光をここにあらわして うつすともしび神もみそなへ

保之

・菅茶山先生が有名になったというのも、河相君推さんというタニマチが後ろに控えていたからでもあり、(笑) 「私たちが君推さんのご恩を菅茶山先生と一緒に顕彰しようじゃないか」ということから、今回の碑林建立になりました。
・君推は屋敷の中に景勝地をつくり、一つ一つに文人墨客が命名・墨書した碑などを造りましたが、今は散逸して現物は「迎碧墩」ただ一つしかありません。我々がもう一遍復元せざるを得ないと考えた次第です。

・そこで顕彰会では松浦正明さんを中心に特別事業を起こし、会員や有志の方々のご支援・協力により十勝碑林を造ることができました。皆様方のご協力で厚くお礼申します。



・碑林という名前は「碑の林」ということですが、日本では聞いたことがなく、我々も初めて知りました。これは日本における「碑林のはしり」といっても良いのではないかと思っています。碑林だ！碑林だ！と推奨してはいかがでしょうか。

(二) 来賓挨拶

① 神辺町長代理 収入役 北村博之様 (要旨)

まずは碑林建立に武田武美氏・松浦正明氏の多大な貢献があったことに敬意と感謝を表します。あわせて菅茶山顕彰会の皆様のご尽力にお礼申し上げます。碑林が菅茶山と君推の旧蹟を後世に伝え、郷土の地域文化の発展につながることを祈念します。

② 広島県議会議員 松岡宏道様 (要旨)

立派な碑林完成を祝い、皆様方のご尽力と努力に敬意を表し感謝いたします。昨今、地域住民による文化財や歴史に対するボランティア、探求活動が盛んに行われています。福山市合併後、行政と連携してこれをどう進めてゆくかが課題ですが、私も努力します。

③ 神辺町議会議長代理 同副議長 福島博光様 (要旨)

碑林完成をお慶びし、菅茶山顕彰会のご尽力に感謝申し上げます。菅茶山顕彰活動がますます発展されますよう祈念いたします。

④ 乾杯挨拶 一般財団法人義倉理事長 藤原平様 (要旨)

後世に伝わる碑林の完成おめでとございます。碑林は珍しく西安碑林が有名ですが、高橋会長の博学に感心しています。義倉創設者の河相周兵衛は中条河相家の分家筋にあたり、少なからずのご縁を感じています。

「河相君推の霊を弔い、菅茶山顕彰会の発展とご出席者のご多幸を祈念し乾杯します。」

三 松風館十勝碑林建立の経緯

本文および前頁「記録一・二」を補足。次頁に当時の「新聞記事」、「菅茶山顕彰会会報」、記録ビデオ「松風館十勝碑林除幕式」などを記載する。

(一) 背景

昭和六十二年(一九八七)、「菅茶山先生遺芳顕彰会」(現在の菅茶山顕彰会)が、神辺町後援の地域文化団体として発足したのは、「菅茶山没後百六十年祭」の翌年のこと。以降、菅茶山を顕彰する活動が神辺町全体で盛んになり、菅茶山伝記や詩歌などが広く見聞され、茶山詩碑が神辺公民館や各地の寺院などに建立された。この金石文化が碑林建立の源流の一つといえる。

(二) 発起人

碑林の主碑「松風館十勝」には、正面に菅茶山顕彰会会長高橋孝一氏、裏面には発起人として武田武美氏と松浦正明氏の名が刻まれている。

高橋孝一氏は当時の著書『お山のこんぴらさま〜芦田川水系の常夜灯』の中で山田谷の象山献燈を紹介している。建立祝賀会での挨拶のとおり、顕彰会会長としてこの事業を主導した。

武田武美氏(当時顕彰会理事)は、松風館跡地の一部を所有する近在者で、地元歴史研究者として松風館・君推について詳しく、碑林建立の発案者である。

松浦正明氏は、自宅に茶山詩碑「農功」を建立するなど、詩碑建立のエキスパートであり、当初から碑林建立の実行責任者として奔走した。

(三) 碑林建立

① 建立の決定

平成十五年(二〇〇三)の「菅茶山生誕二五五年祭」の余韻が残る頃、前述発起人を中心に、碑林建立の企画が始まった。顕彰会役員を始め、神辺町、地元町内会などの賛同・協力も得られることになり、平成十七年に顕彰会の特別事業として建立事業がスタートした。

② 建立場所

松風館跡地の西南角で、東には象山献燈があり、北には土居屋敷跡と河相家墓地がある三差路が選ばれ、土地は小公有地と勝願寺様及び武田武美氏の所有地の一部で、いずれも無償貸与頂いている。

③ 石碑製作

石碑は藤原石材工業(株)(福山市引野町)が製作した。

○「松風館跡」碑 神辺町長佐藤秀毅氏の揮毫。伊予の青石(緑色片岩)

○「松風館十勝」碑 白御影石の四角石柱で、中国から輸入

○「碑林協力者」碑 建立当時の菅茶山顕彰会役員の氏名碑で、赤御影石に会長以下三十名が記されている。

○その他の石碑 風情ある銘石に由緒ある文字が刻されており、見学者の興味を高めるものである。「十勝碑」の文字は「語論亭」を除き、「紙本墨書衝立」を原本に刻印されている。

石碑の材質については次頁のとおり。

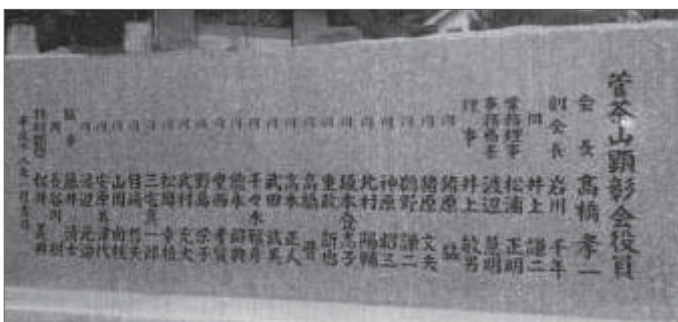
④ 碑林造成工事

藤原石材工業(株)が、敷地造成から建立までの全工事を行った。工事は平成十七年(二〇〇五)十月から始まり、翌年一月に完成した。

(四) 事業費

平成十八年二月の決算報告資料には、碑林建立資金は総額約三八〇万円とあるが、詩碑三基は含まれていないと考えられている。

資金内訳は、顕彰会会計のほか、会員協賛金、神辺町寄付、特別個人寄付などである。



碑林建立の報道記事
中国新聞
平成 18 年 1 月



碑林除幕式
DVD ビデオ
制作 井原放送

菅茶山と交友 神辺の豪商 河相邸宅跡地に記念碑

(第三種郵便物認可)

君推の邸宅跡地で建立の工事が進む記念碑を確認する武田さん(左)と松浦さん

来月除幕 詩碑など16基を配置

江戸後期の儒学者菅茶山と交友のあった豪商 人が集い、詩会の場となった旧跡を後世に伝え、河相君推(一七五六―一八一八年)が住んだ神 邊、中条の愛好家である菅茶山顕彰会(高 辺町中条の邸宅跡地)で、かつての栄華をしの 橋孝一(会長)が企画した。二月上旬に除幕式を 念記碑の建立が進んでいる。茶山ら多くの文 明。

君推は現在の神辺町西 中条で酒造業を営んだ豪 商。漢詩に通じ、町内に 廉塾を開いた茶山と交流 を深めた。敷地約三千平 方尺の邸宅「松風館」に 茶山をはじめ全国の文人 を招き、詩会や酒宴を開 いたという。

松風館の庭園には池、 橋、小山、茶室など十カ 所の「名勝」があり、君 推は訪れた文人にそれぞれ の命名と石碑への揮毫 を依頼した。「松風館十 勝」と名付けられ河相家 の繁栄の象徴となった。 その後に石碑は散逸し、 跡地は今は所有者が複 数の私有地になつてい る。

跡地の一部を所有する ライフドア副社長 尾道で19日に講演

ライフドア副社長 尾道で19日に講演

ライフドア副社長 尾道で19日に講演

顕彰会の武田武美理事 が、町の歴史の伝承を願 っ て石碑の建立を提案。 松浦正明常務理事が中 心になつて寄付金集め などをしてきた。茶山ら が命名した「誤論亭」「浸 翠池」「鳴玉橋」などの 文字を刻んだ十基と、 茶山の詩碑など計十六 基の石碑を制作。三十五 平方尺の敷地に配置す る。

昨年十月から工事を進 め、二月上旬に町関係者 や顕彰会メンバーを集め て除幕式を開く。松浦常 務理事は「中条地区はか つて文化や商業で栄えた 地。茶山や君推の功績を 広く町内外の人に伝える 場になれば」と除幕を心 待ちにしている。

ライフドア副社長 尾道で19日に講演

(1) 菅茶山顕彰会会報 第16号



松風館十勝碑林

菅茶山顕彰会会報

第16号
菅茶山顕彰会
2006年2月28日

「松風館十勝碑林」建立に寄せて

高橋孝一

河相君推と松風館
河相君推、実名は保之、備中後月郡井原村の産で西中 条山田谷に居住した。富豪にして書画を蔵し和歌を嗜む 菅茶山と姻戚の關係があり遠祖は源氏佐々木氏である 酒造業を営み数寄屋蔵した屋宅を構え松風館と名付 けた。菅茶山は黄葉夕陽村舎に立ち寄った天下の有名人 士を伴い訪れて屢々詩会を催した。

君推は酒宴の席で心から敬慕した。松風館十勝の名称 はこれらの人々によって命名揮毫されたものが多い。

(松風館十勝碑)の撰文より)

※河相君推(宝暦六年(一七二六)文政元年(一八二〇) 漢詩人茶山について、儒者尾田朋斎をして「君君、詩を以 て世に開る」と言わしめたように、当時の著名な儒者たちの 金石文が、このように神辺の地にもたらされた意義は大い。

昨年、この史跡を顕彰するため、松風館記念碑建立を発起 したところ、顕彰会役員ならびに有志の方の格別のご理解と ご協賛をいただき、今回、ゆかりの地に、三基の松風館関係 碑と十基の十勝碑、三基の詩碑が建立されました。そして、 この庭園を中国の「西安碑林」に倣って、「松風館十勝碑林」と命名しました。

ご尽力で、尽力いただいた関係各位に、深く敬意と感謝の 意を表するとともに、この「碑林」が茶山文化を継ぐよすが となり、福山市との合併記念として、神辺の新たな史跡名所 となることを願うものです。

(菅茶山顕彰会 会長)

松風館十勝碑林の石材

	碑銘	種類	備考(石材名など)
十勝碑	1. 松風館	(白)花崗岩	白御影石
	2. 棟棠橋	砂岩	堆積岩
	3. 鳥語澗	安山岩	火成岩
	4. 鳴玉橋	(錆)花崗岩	錆御影石
	5. 迎碧墩	安山岩	
	6. 浸翠池	安山岩	
	7. 紅於徑	安山岩	
	8. 魚樂梁	(白)花崗岩	白御影石
	9. 垂白棚	玄武岩	火成岩
	10. 誤論亭	上部:花崗斑岩 下部:(白)花崗岩	嵌め石:片麻岩
詩碑	1. 所見	斑瀾岩	黒御影石 輸入
	2. 松風館即事	オニックス大理石 (結晶質石灰岩)	嵌め石:斑瀾岩
	3. 頼春水詩碑	閃緑岩	青御影石

四 松風館十勝碑林建立十五周年記念事業

菅茶山顕彰会が碑林を建立してから十五年余りが経過した。菅茶山ゆかりの「河相君推と松風館」を碑林として具象化した先輩諸氏の意図を継承し、令和二年度から「碑林建立十五周年記念事業」に取り組む。

これらの事業により、この碑林が史跡名所として、より多くの人々に訪れてもらい、中條村を舞台にした茶山と君推や文人達の交遊を知っていただきたい。さらには、この活動が中条地区の「地域おこし」の一助となれば幸甚である。

一 主な周辺整備

- ① 駐車場の新設
- ② 説明板・案内板の設置
- ③ 植樹 枝垂れ梅、枝垂れ桜など
- ④ 環境の整備（溝蓋設置、剪定など）

二 資料作成

- ① 記念誌『河相君推と松風館十勝』
- ② 葉『松風館十勝碑林のご案内』



高橋孝一氏記念樹
枝垂れ桜（イメージ）



記念樹枝垂れ梅



駐車場

説明板

整備後の全景



駐車場新設工事



説明板新設



植木の選定作業

漢詩索引 茶山・君推年表

1785	1784	1783	1782	1778	1775	1773	1766	1757	1748	西暦
天明				安永			明和	宝暦	延享	和暦
5年	4年	3年	2年	7年	4年	2年	3年	7年	5年	年齢
38	37	36	35	31	28	26	19	10	1	茶山
29	28	27	26	22	19	17	10	1		君推
松風館等	中條路/遍照寺	遍照寺	中條路/遍照寺	遍照寺	神辺	京都		中條	神辺	場所
「明河頼千相君推宅即事分得雨字呈西山先生姫井仲 所各中條山聯詠」 （登山待月） ③②	「雪登同道光上人登黄龍山遍照寺分得一字」 門田氏宣と再婚 ④①③①	「送大空上人高野山」 ③①	「九日上寒水寺路上」 ③⑧ 「松間」 ③⑨ 茶山妻為没	「中秋登遍照寺作 子蘭」 ②⑦ （大道） ②⑦	内海氏為と結婚	「次子璐叔姪東遊」 ②⑥ 「琵琶湖韻」 ②⑥	京都遊学（安永九年計六回）	河相君推誕生	菅茶山誕生	「漢詩」（茶山同行者）出来事など
							明和一揆			

①
②
・
は記載頁番号

1798	1797	1795	1794	1793	1792	1790	1788	1787	1786	西暦
寛政							天明			和暦
10年	9年	7年	5年	4年	3年	2年	8年	7年	6年	年齢
51	50	48	46	45	44	43	41	40	39	茶山
42	41	39	37	36	35	33	32	31	30	君推
中條路/遍照寺	神辺	松風館	中條路/遍照寺	松風館	神辺	松風館		中條路/遍照寺		場所
「同充國訪子蘭」 ③④	神辺学問所（廉塾）となる	「松風館即事（箱藏古畫）」 ①② 「郷塾取立に関する書簡」藩に提出	「即事（晨氣寒林）」 ④②	「福山藩儒医五人扶持 春水」 ①②	茶山父樽平没	「齋」 ①⑧ 寛政異学の禁	「松風館即事（詩罷松窓）」 ①③	松平定信老中筆頭就任	「黄龍山」 ③③ 「丁屋路上」 ④④ 「所見（落日殘紅）」 ④②	「同道光上人登黄龍山分得一字」 ③② 「出来事など」
							天明一揆			

1811	1810	文化7年以前の作	1809	1807	1805	1804	1802	1801	1800	1799	西暦
文化			文化				享和		寛政		和暦
8年	7年		6年	4年	2年	元年	2年	元年	12年	11年	年齢
64	63		62	60	58	57	55	54	53	52	茶山
55	54	53	51	49	48	46	45	44	43	君推	
松風館	中條路	中條路/松風館	松風館	神辺	松風館	江戸	松風館		京都	中條路	場所
「松風館 二首 頼山陽」 ⑳㉑㉒	「十七夜雨還自中條」 ④④	「次韻小河貞藏中條途中作」 ④③ 「遍照寺」 ③⑦ 「山中示河篁諸子」 ③⑦ 「登黄龍山」 ③⑥ 「次韻大空上人感事」 ③⑥ 「同道光上人登黄龍山分得重字」 ③⑤ 「高見新助書悽然賦此」 ③④ 「偶檢巾箱得亡友藤井蘭水管波子裕松井子璐」	「與業夫諸子訪松風館」 ②① 『福山志料』	神辺大火	石標設置 迎碧墩、浸翠池、紅於徑、垂白棚の	江戸出府（一回目）	娯論亭扁額設置	福山藩儒	茶山弟恥庵京都で客死	「中條歸路次文輔韻」 ④③	「漢詩」 「茶山同行者」 出来事など
<p>頼山陽 在廉塾 文化6年~8年</p>											

1832	1827	1826	1823	1819	1818	1816	1815		1813		1812		西暦
天保	文政				文化								和暦
3年	10年	9年	6年	2年	1年	13年	12年	11年	10年	9年			年齢
	80	79	76	72	71	69	68	67	66	65			茶山
					62	60	59	58	57	56			君推
	神辺	神辺	中條路		松風館/大和	松風館		江戸	神辺	中條路			場所
『黄葉夕陽村舎詩』遺稿	菅茶山没享年八十歳 門田朴斎離縁菅三養子縁組 八十歳祝宴	『花月吟』 妻宣没	『箱田道中』 ④⑦ 『黄葉夕陽村舎詩』後編	『福山藩風俗御問状答書』	『河相君推没享年六十二歳日記』	象山献燈建立（茶山書 君推和歌）	魚樂梁の石標設置 江戸から帰郷	江戸出府（二回目）	恥庵追善詩会 北条霞亭都講となる	『上廣山寺途中作』 ④⑤ 『黄葉夕陽村舎詩』前編 ④⑤		「與佐藤子文同往中條路上口號」 ④④ 「圓通寺同諸子賦」 ④⑤	「漢詩」 「茶山同行者」 出来事など
<p>君推の後継者 河相庄衛門滋之は 安政6年(1859) 没 後継者なく絶家</p>													

参考文献

- 『黄葉夕陽村舎詩 復刻版』 児島書店
- 『茶山詩五百首』 島谷真三・北川勇 児島書店
- 『中條菅茶山と西中條 遍照寺編』稿 松井義典氏遺稿
- 『菅茶山と中條』稿 松井義典氏遺稿
- 『松風館十勝』稿 武田武美氏遺稿
- 『黄葉夕陽村舎詩』 栗田 豊 呉孔版印刷有限公司
- 『松風館十勝』 第十八回特別展示 菅茶山記念館
- 『菅茶山 上巻下巻』 富士川英郎 福武書店
- 『福山志料 復刻版』 福山志料刊行会
- 『頼山陽詩集』巻七松風館 頼山陽全書
- 『茶山詩話』(北川勇講演集) 菅茶山先生遺芳顕彰会
- 『菅茶山顕彰会会報 復刻版』 菅茶山顕彰会
- 『神辺町史』 社会教育課神辺町史刊行係
- 石碑「黄龍山遍照寺」 黄龍山遍照寺
- 『菅茶山と遍照寺及大空上人』 猪原薫一 備後史談一卷二号
- 『中秋登遍照寺作』二首 備後史談十卷八号
- 『梨木裕為と和歌』 備後史談十四卷七、八号
- 『深安郡中條村旧蹟探訪記』 猪原薫一 備後史談十六卷七、十号
- 『西中條村誌』 金尾直樹著 備後史談十六卷十号
- 『松風館十勝』 猪原薫一 備後史談十六卷十号
- 『河相氏の出自と系脈』 濱本鶴賓 備後史談十八卷一、三号
- 『菅茶山遺稿』 柏木順子 大平書屋
- 『現代文 菅茶山翁筆のすざび』 菅茶山遺芳顕彰会
- 『西山拙斎』 朝森 要 鴨方町教育委員会
- 『菅茶山とゆかりの人々』 菅茶山記念館
- 『菅茶山ゆかりの拓本展』 菅茶山記念館
- 『菅茶山の詠歌』 菅波 寛 葦陽文化研究会
- 『菅波信道一代記』『日本都市生活史料集成八』 学習研究社
- 『寒水寺縁起』 福山市神辺歴史民俗資料館HP
- 『広山寺縁起』 福山市神辺歴史民俗資料館HP
- 『金毘羅宮』 フリー百科事典ウィキペディア
- 『山本北山』 フリー百科事典ウィキペディア
- 写真・画像等
- 『頼山陽肖像』 『菅茶山と頼家の人々』 菅茶山記念館発行
- 『西山拙斎画像』 『西山拙斎』 鴨方町教育委員会
- 衝立「松風館十勝墨書」 海田町所蔵(千葉家旧蔵資料)
- 『迎碧墩』 『中条の石造物』 中条学区まちづくり推進委員会
- 『松風館十勝推定地図』(本文「仮説松風館十勝」) 園尾俊昭
- 挿入写真撮影 園尾俊昭
- ビデオ『松風館十勝碑林除幕式』 菅茶山顕彰会編

終りに

菅茶山顕彰会顧問 上 泰二

先ず初めに、惜しくもこの松風館十勝碑林建立十五周年記念事業完成を待たずして、一昨年相次いで他界された当該碑林建立を発起された高橋孝一會長、武田武美理事、自らの郷土に関わる調査・研究・整理された私家本と諸々の貴重な関係図書コレクションを次世代へ遺された松井義典顧問、本会報編集長・各種記念出版事業編集に尽力された武村充大理事、茶山ポエム絵画展創始に貢献された三宅真一郎理事など、在任中のご貢献に深甚なる謝意を表し、衷心より哀悼の意を捧げるとともに、この一編を各位の尊い御魂に献げると同時に、碑林敷地を無償で提供していただいた勝願寺並びに武田武美ご遺族のご英断にも感謝の誠を捧げたい。

去年は当該碑林建立十五周年に当たり、記念冊子『河相君推と松風館十勝』の発刊を企画し、山田谷一帯に十勝を配した松風館主河相君推と天下の文人墨客を随伴、時を忘れ、足繁く中条路を往来した茶山の足跡を辿りながら、当時の地元中條村の文人たちの活き活きした文化活動をも掘り起こす作業に挑戦した。

最終決定稿に至る工程の中で、『備後史談』を原典に、武田武美氏作成の「松風館十勝(稿)」「十勝配置推定地図(考証)」や、茶山関連の詩碑を網羅した『菅茶山の面影を訪ねて』(二〇〇四年)を執筆の松浦正明理事など数多の先達の道標をよすがに、編集委員がそれぞれに漢和辞典を片手に、『黄葉夕陽村舎詩』や『茶山詩話』などの文献と首っ引き、パソコンのIMEパッドで旧漢字検索、若しくは、「矢立と詩囊」ならぬ「カメラ&スマホ」を携えた取材行脚など。

菅茶山顕彰会よ！不滅であれ！を合言葉に

さらには、コロナ禍により編集作業は幾度も延期を余儀なくされ、やっと発行に漕ぎつけることができた。この冊子が地元神辺・中条の「温故創新」になればとの希いをこめ、今回の特別プロジェクトは完了した。

さて、コロナウイルス感染症パンデミック下、「外来語」ならぬ「外頼語」(此々呂和人提唱)が氾濫、日本語は崩壊の一途を辿り、その余波をもろに受け、日本語のルーツ漢文・漢詩文は、敗戦時に次ぐ二度目の存亡危機を迎えていると言っても過言ではない。

こうした現況下、本会は令和元年度から、会員の高齢化、漸減化を食い止め次世代へ繋ぐため、「茶山詩を通じて茶山を学ぶ」参加・体験型の「茶山学習会」を継続開催するなどして往時の復活に努めている。残念ながら漢詩文に長けた人材に乏しくこれまで、諸先輩が出版された書籍を参考に会員が学習発表するという形態で挑戦している。

更に、本会が「茶山文化」の担い手として顕彰活動を続けるためには、多世代からの入会により本会継承基盤をつくり、現新会員が力を合わせて、伝統行事の活性化、新規プロジェクトへの取り組みむことが大切と考えている。

読者各位には、本会へのご支援ご協力をお願いしたい。

末筆ながら、常日頃、本会の出版事業、更には本誌編集に関わって貴重な資料提供していただいた菅茶山記念館、揺るぎない史実考証に裏打ちされたご懇篤な教示を頂いた古文書研究家林多恵子氏など関係者各位に衷心より謝意を表して結びとしたい。

令和四年一月吉日

松風館十勝碑林建立十五周年記念事業

「河相君推と松風館十勝」編集委員会

委員長 藤田 卓三

主筆 黒瀬 道隆

委員 上 泰二

委員 鶴野 謙二

委員 皿海 弘雄

委員 武田 恂治

委員 松岡 明美

写真 園尾 俊昭

「河相君推と松風館十勝」

～菅茶山と中條村の文人たち～

編集発行 菅茶山顕彰会

事務局 武田 恂治

連絡メールアドレス

info@chazan/click

ホームページ「菅茶山新報」

<http://www.chazan.click/>

発行日 令和四年一月吉日

印刷 社会福祉法人 一れつ会 ウイズ

福山市加茂町上加茂八〇五―一
電話（〇八四）九七二―八六八六

